に居る」ことであつたであらう、然し彼に干はるエホバの聖意は之れとは正反對であつた。

「エホバ我に言ひ給ひけるは、汝、我は幼少しと言ふ勿れ、すべて我が汝を遣はす所に往き、我が汝に命ずるすべての言を語るべし、汝、彼等(人)を畏るゝ勿れ、そは我、汝と偕にありて汝を濟ふべければなり(七、八節)

青年のエレミヤはイザヤ、アモス、ホゼヤ、ミカの如く預言者たるへし、彼は己の歳の足らざるの故を以て預言の重職を辭退すべからず、そは預言者たるは己の智慧を以て謀り、己の言を語ることにあらざればなりとのことであつた、エレミヤは未だ預言の何たるを知らなかつた、彼の預言者たるは神の機械となることであることを知らなかつた、「我の意志は神の意志をなすにあり」との信仰の秘訣は今始めて彼に傳へられた、彼は若年でも可い、然かり、若し神の聖意とあれば無學でも可い、唯神の聲を識別するの能さへあれば可い、此能さへ神より賜はらば彼は人を畏るべきでない、神は彼に取り「最と近き援助」である、彼は今より獨り立て萬國を相手に鬪ふべきである。

エホバ遂に其手を伸べて我口につけ、エホバ我に言ひ給ひけるは、視よ、我れ我言を汝の口に入れたり、視よ、我、今日汝を萬民の上と萬國の上とに立て、汝をして或ひは拔き、或ひは毀ち、或ひは滅し、或ひは覆し、或ひは建て、或ひは植しめん(九、十節)

始めにエホバの言彼に臨み(四節)、遂に其の手彼の口に觸れたりと云ふ、是れは抑々何う云ふことであらうか、言を以て傳へしことを手を以て實行し給へりと云ふことであらう乎、或ひは手を伸べて閉ぢたる口を開き、彼に雄辯の能力を賜ひて、彼をして沈默を破らしめ給へりと云ふことであらうか、或ひは我言を汝の口に入れたりとあれば、大思想を彼の心に注入して彼をして大聲疾呼せざるを得ざるに至らしめ給へりといふことであらう乎、文字の解釋は至て困難である、眼に見えざるエホバに肉の手のありやう筈はない、然り、エホバの手はエホバの力である、その預言者の口に入りしとあるは力が彼に臨んだとの事であらう、彼は此時彼が未だ曾て知らざりし權能の彼

に加へられしことを感じたのであらう、憶病なる彼は今や勇者となつたのであらう、懐疑の彼は今は確信の彼となつたのであらう、彼は今、頼るべき或る確實なる物を感ずるに至つたのであらう、爾うしてエホバは此新らしき能力を彼に加へ給ひて更らに彼に宣べ給ふたのであらう「視よ我、今日汝を云々」と。

十九歳の青年、彼は今は萬民の上と萬國の上とに置えられた、彼は今は牧伯以上、帝王以上の者となつた、彼は僅にユダヤ一國の上に立て其運命を支配すべきものではない、エジプト人とエジプト國の上に立ち、バビロン人とバビロン國の上に立ち、フィニシヤ人とフィニシヤ國の上に立ち、即ち彼れ在世當時のすべての國民の運命を卜し、其罪を責め、其罰を宣告し、其滅亡を判決すべき者となつた、預言者とは斯かる者である、彼は讀んで字の通り必しも預め言ふ者ではない、即ち先見者たるのみではない、希伯來語のナビーは沸騰する者の意であるとも云ひ、又は單に告知者の意であるとも云ふ、若し沸騰者ならば憤慨者、民の罪惡を憤る者、抑へんと欲して抑ふること能はざる感慨有の儘を噴出する者である、若し告知者ならば神の聖意を民に告げ知らする

者である、然かれども字義を離れてナビー(預言者)其物に就て言へば、彼は先見者で沸騰者で告知者である、爾うしてエレミヤの如きは其最も顯著なる者で最も熱烈なる者であつた。

彼は今より國民を拔きもし、毀ちもし、滅しもし、覆しもし、建てもし、植えもするとのことである、彼が之をなすと云ふは勿論、彼は神の聖意を語る者である故に、彼の言辭は必ず事實と成りて顯はるべしとのことである、彼れ荏弱の一青年なりと雖ども、彼れ若しエジプトに滅亡を宣告すればエジプトは終に亡ぶべしとのことである、彼れ若しユダヤに再興を約束すればユダヤは終に再び興るべしとのことである、時の強國たるアッシリヤもバビロニヤも、又第二等國に位ひしたるエドム、アモン、エラム等も、彼の言辭のまに〳〵或ひは亡び或ひは興るべしとのことである、偉大なるかなナビー(預言者)の權能、大王ネブカドネザルと雖も此權能を有たなかつた、而かも此權能が十九歳の一青年に附與せられたとのことである、彼れ若し暗愚ならば彼は宗教狂となり果てたであらう、預言者たるの難きは他を責むるよりも己を慎むにある、然し

エレミヤは此大任を負はせられて彼の常識を失はなかつた。

エホバの言また我に臨みていふ、エレミヤよ、汝、何を視るやと、我れ答へけるは巴旦杏の枝を視ると、エホバ我に言ひ給ひけるは汝善く視たり、そは我れ速かに我言をなさんとすれば也(十一、十二節)。

エホバの言再び我に臨みて云ふ、汝、何を視るやと、我れ答へて曰ひけるは沸騰たる鑊を視る、其面は北より此方に向ふと、エホバ我に言ひ給ひけるは災、北より起りてこの地に住めるすべての者に臨らん(十三、十四節)。

エホバの大能彼に降りて後に、エレミヤは一日庭前に於てか、或ひは郊外に於てか巴旦杏の枝を見た、彼の詩眼は直に此樹の枝に神の聖意を讀んだ、ユダヤの巴旦杏は日本の梅のやうな者である、花の魁と稱せられ、嚴冬未だ去らざるに其梢に雪ならぬ花を咲かする者である、故に希伯來語にては之をペコースと云ひて醒むる者の意である

「期未だ至らざるに冬期の睡眠より醒むる者」、是れが巴旦杏である、想ひしよりも早く咲く花、噫、此樹はユダヤ國の運命を告知らす者であらう、此國に干はるエホバ

の言は人が想ふよりも早く實行されるであらう、正義の裁判は速かに臨むであらう、ペコース(巴旦杏)の花が時ならぬに咲くやうに神の憤怒は時ならぬに(ペカース)不義を悅ぶ此國民の上に落來るであらう、ペコース(pekohs巴旦杏)はペカース(pekahs急速、不意)の表號であらう、天然は善く之を解すれば神の言辭である、巴旦杏は眠れる民に覺醒を告ぐる神の言辭であると。

田舍の預言者にして田園詩人たりしエレミヤは巴旦杏の一枝に神の深き聖意を讀んだ、彼に取ては草も小石も有力なる說敎であつた、爾うして彼に降りし最初の默示は巴旦杏の一枝に由てゞあつた、彼は實にヲルヅヲス以上の天然詩人であつた。

(巴旦杏の如何なる樹であるか、之を「はたんけやう」と訓まずして「あめんどう」と訓むべき事等に就ては之れを『聖書之研究』第廿二號「聖書の植物」巴旦杏の篇に於て讀まれたし)。

巴旦杏に神の裁判の臨むべき時期を讀みしエレミヤは沸騰たる鑊に其來るべき方向を見た、鑊とはユダヤ人の使用する普通の家具であつて、恰かも我國に於ける鐵瓶の

如き者である、彼れ一日鑊のその口を北より南に向けて沸騰蒸發しつゝあるを見て、神の憤怒の北より南に向つて臨み來るを知つた、水が鼎の中に在て沸騰するが如く、正義は神の心の中に噴起しつゝある、爾うして預言者の目前に鑊が其口を北より南に向けて熱き蒸汽を吐きつゝあるやうに、神の義憤は北方の地より南を指して此ユダヤ國に臨むであらう、時は不意に、人の想ふよりも速かに、方向は北より南に向て神の裁判は臨みつゝあると、エレミヤに臨みし第二回の默示は沸騰せる鑊に由てゞあつた。

巴旦杏と鑊、梅と鐵瓶、瑣々たる此天然物と些細なる此家具とは國民の運命を此青年預言者に傳へた、神は其聖意を其愛子に傳ふるに方て必ずしも雷霆の聲を以て大岳の上より轟き給ふに及ばない、梅の一枝を以て、或ひは煮え立つ鐵瓶を以て、宇宙の奥義を人に示し給ふ、耳ある者は聽くべし、眼ある者は視るべし、神の默示は臺所に在り、路傍にあり、必しも高壇の上よりする說敎師の說敎を聞くに及ばない、又山中に隱退して人生の秘密に就て沈思默考するに及ばない、エレミヤはまことは田園詩人にして家庭の預言者であつた。

鐵面皮は惡いことである、鐵面皮はまた善いことである、恥に對するの鐵面皮、義と情とに對する鐵面皮は惡いことである、然し不義に對する鐵面皮、殊に權力に依る不義と壓制と暴虐とに對する鐵面皮は善いことにして賞すべきことである、爾うして神と正義とのために盡さんと欲する者には此種の鐵面皮がなくてはならない、正義は美はしいものである、然かし花のやうに、美人のやうに美はしい者ではない、正義の美はしいのは山岳の美はしいやうに美はしいのである、之に巍々たる所があり、嵯峨たる所があるから美はしいのである、故に其唱道者たる者にも亦崎嶇たる所、鬱崛たる所がなくてはならない、彼は所謂る八方美人であつてはならない、寛容を唱へて何人でも之を懷けんとする人であつてはならない、預言者は磐でなくてはならない、鐵でなくてはならない、エホバ預言者エゼキエルに言ひ給はく我れ汝の額を金剛石の如くし、磐よりも堅くせりと（以西結書三章九節）、爾うして預言者エレミヤも亦萬國の

預言者として世に立つに方ては鐵面石心の人とならなくてはならない。

汝腰に帶して起ち、我が汝に命ずるすべての事を彼等に告げよ、彼等の面を懼るゝ勿れ、否らざれば我れ彼等の前に汝を辱かしめん、視よ我れ今日此全國と、ユダの王等と、その牧伯と、その祭司と、その地の民の前に汝を堅き城、鐵の柱、銅の牆となせり、彼等、汝と戰はんとするも汝に勝たざるべし、そは我れ汝と偕に在りて汝を救ふべければなりとエホバ言ひ給へり(一章十七、十八、十九節)。

「人の面を懼るゝ勿れ」、彼等は必ず憤怒を以て汝に向はん、彼等は彼等の舊き習慣の打破せらるゝを好まざるべし、彼等は彼等の不義僞善を摘指せらるゝを歡ばざるべし、汝は彼等の中に在て邪魔物として扱はるべし、然れども彼等の面を懼るゝ勿れ、彼等は彼等の面に現はるゝが如き畏るべき者にあらず、彼等の心は彼等の面の如くに恐しからず、彼等の良心は靜かなる所に於て彼等を責むるなり、彼等又時には死の恐怖を以て襲はれ、神の裁判を想像して戰慄するなり、然り、彼等の面を畏るゝ勿れ、彼等の面に對して彼等の罪惡を述べよ、汝、外より言辭を以て彼等を攻めよ、我、衷より良心の聲を以て彼等を責めん、彼等は多數にして汝は一人なり、然れども我れエホバの神の汝と力を合せて彼等の背後より彼等を責むるを忘る勿れ。

「彼等の面を畏るゝ勿れ、否らざれば我れ彼等の前に汝を辱かしめん」、汝、若し我が味方となりて彼等を責めざれば我は汝の敵となりて彼等をして汝を辱かしむべし、汝、彼等を逐はざらん乎、彼等の逐ふ所となるべし、世の歡ぶことにして神の使者を窘むるが如きことあるなし、汝は彼等の嘲弄物となるべし、士師サムソンの如くに異邦人の前に索かれて其弄ぶ所となるべし(士師記十六章を見よ)。

預言者の責むべき人とは誰ぞ、「此全國と、ユダの王等と、その牧伯と、その祭司と、その地の民」とである、卽ち國王と、政治家と軍人と、宗教家と、國民全體とである、彼は卽ち全國を相手にして立つべき者である、彼は勿論王公貴族の辨護者ではない、富豪の代辯者ではない、宗教家の一人ではない、去りとて亦世に所謂る平民の友でもない、彼は神の僕である、故に神に敵する者には貴族にも平民にも敵する者である、彼の屬する黨派なる者はない、彼は神と偕に立つ者であ

る、世に若し彼の外に神と偕に立つ者あらん乎、斯かる人は其の貴族なると平民なると、政治家なると軍人なると、宗教家なると平信者なるとに關はらず、皆彼の友である、然れども若し斯かる人一人もあらざらん乎、彼は一人で立つべきである、彼は異邦のギリシャ人に倣ひ人は社交的動物であるとの言に從つて、强ひて同志を求むべきではない、彼に賴るべきの階級はない、彼は貴族でもなければ平民でもない、彼に彼の屬すべき黨派はない、彼はエヂプト黨でもなければ、バビロン黨でもない、彼に彼の歸依すべき教會はない、彼は祭司でもなければレビの族でもない、彼は神の僕である、故に墮落せる當時の社會に在ては彼は止むを得ず孤獨たるべきである、而して彼は孤獨たるを悲んではならない、エホバの神は彼と偕にありて彼を救ふべしとのことである、單に孤獨たるばかりではない、彼は國王、政治家、軍人、宗教家、平民、卽ち全國民に對して鐵の面と金剛石の額とを向くべきである、彼等の罪惡は決して假借すべきでない、姪縱は姪縱と呼ぶべきである、奢侈は奢侈と稱ふべきである、僞善は僞善として攻むべきである、國王の嗜好なればとて罪惡を罪惡以外の名を以て稱すべ

きではない、民の輿論なればとて輿論に阿るべきではない、黑は黑、白は白、事實有の儘を唱ふべきである、斯く爲して彼は此社會に在て敵地に陣を張るの境遇に立たざるを得ない、彼は週圍に敵を受くるの覺悟を爲さなければならない、故に神は彼を地の民の前に堅き城、鐵の柱、銅の牆となし給へりと、弱き脆き一青年、身に寸鐵を携ふるにあらず、彼に階級、黨派又は教會の保護あるに非ず、然れどもエホバの言を身に體して彼は獨り立て敵人繞圍の中に金城鐵壁たるべきである。

「彼等汝と戰はんとするも汝に勝たざるべし」と、神の預言者たる一青年は國王、政治家、軍人、宗教家、平民、卽ち國民全體よりも强かるべしと、神が彼に在りて國民の中に降りたるなれば、國民は誤るとも彼は誤らざるべし、元老の議は敗るとも彼の言は成るべし、預言者一人は全國民よりも强し、國民は擧て敵國を亡し得るも預言者一人を亡し得ざるべし、然り、彼を殺すを得ん、然れども彼の生命なる彼の言は生存して事實となりて現はれて終には罪惡の民を滅すべし、禍ひなるかな預言者を送られし罪惡の民よ！彼等の運命は既に定まれり。

「我れ汝と偕に在りて汝を救ふべければ也とエホバ言ひ給へり」世は擧つて立つも預言者に克つ能はざる說明は玆に在る、エホバが彼と偕に在りて彼を救ひ給ふからである、彼れ自身に不拔の精神があるからではない、不撓の精力があるからではない、エホバが彼に由て語り、エホバが彼を以て動作き給ふからである、世は人が欲ふやうに成るものではない、神の渝らざる聖意に從つて進むものである、預言者の强さは彼は此聖意に託るからである、世の人の弱きは彼等は自己に賴るからである、預言者に世に克つの力があるのではない、彼は神に從ふが故に神と偕に世に克つのである、預言者は世に克つの祕訣を知る者である、彼の强きの故を以て彼を褒むべきではない、彼の聖き智慧を讃すべきである、然り、彼に賜はりし信仰の故を以て彼を羨むべきである。

女王エステル

以士帖書の研究

(讀者は此編を讀む前に必ず一回又は二回以士帖書を注意して通讀せられんことを要す、然らざれば此の編の意を解すること難かるべし)

以士帖書、此書が聖書の中に有らうとは何うしても思はれない、先づ第一に聖書は神の書であるのに、此以士帖の書には神とかエホバとか云ふ詞は一つも見えない、第二に神の事業を頌めまつるのが聖書の目的であるのに此の書は人の業を記載するのみで、一言の神の聖業に說き及ばない、而已ならず、此以士帖書の記事は至て世俗的であつて、或ひは東洋風の宮庭の內幕であるとか、或ひは嫉妬復讐の實歷であるとか云ふやうな事ばかりを以て滿ちて居て、何處から見ても此書が聖書の一部分であるとは受領難くある。

然るに最も不思議なる事には此書を今日まで傳へたる猶太人自身は此書に非常の重き

を置いて居る、彼等は曰ふ、「縱令律法と預言者とは失することあるとも以士帖書は消ゆることなし」と、彼等は毎年アダルの月(十二月)の十四日と十五日とにプリムの節なるものを設くるが(九章廿一節)其日には彼等の會堂に於て教師は必ず此書を通讀するを以て例式とする、尤も此書の神聖なる事に就て疑を懷いた者は今日まで幾人もあつた、有名なるルーテルの如きも其一人であつて、彼は曰ふた、「余は此以士帖の書に反對す、余はその存在せざらんことを欲す、此書は餘りに猶太人的にして其中に多くの異教的非行を記載す」と、然しながら斯かる有力なる反對ありしにも係はらず此書が今日まで聖書の中に儼然たる地位を占め來り、今日に至ては何人も之を聖書の一部分として認むるに至つたのは實に不思議なる事である。

然しながら、聖書問題から全く離れて此書を見れば、是れは最も興味ある歴史的の記錄であることが分る、抑々アハシユエロス王とは何人であるかと歴史を索ねて見ると彼は希臘人がゼルキゼス(Xerxes)と稱へし波斯國の大王であつて、二百萬の大兵を提

げ、ヘレスポントの海峽を渡り、セルモペリーの嶮路にスパルタ王レオニダスの率ひし小軍の勇猛なる反抗を受け、纔かに之を鏖にするを得て雅典の城市に入り、火にて之を燼くし、後、コリント、スパルタへと其兵力を及さんとして、セミストークルスの智略に抗し難く、サラミスの海戰に一敗地に塗れ、這々の態にて波斯本國にまで逃げ歸りしと云ふ古代史上に於ける有名なる人物である、彼が歴史の舞臺に於て演じたる事蹟は歴史の始祖と稱へらるゝヘロドータスに由て最も活人的に畫かれたが、然し歴史家のためには最も幸にして、爾うして大王自身のためには最も不幸なることには、彼の裏面の生涯、即ち宮廷内に於ける彼の情性、彼の下賤なる品性、彼の薄弱なる意志等は希伯來人の中の或る記者に依て、是れも最も活人的に、此以士帖書に於て畫かれたのである、我等は此以士帖書を讀みて後、ヘロドータスの大著述に大王ゼルキゼスの事蹟を探る時に、大王の人物が内外相照らして躍如として我等の眼前に現はれ來るのを覺ゆるのである、爾うして斯かる品性を以て斯かる大失敗を招きし理由を明白に解し得て、我等は一層深く歴史の趣味を感ずるに至るのである。

波斯王ゼルキゼスは古代史に於ける最も著名なる人物の一人である、彼ありしが故にセルモペリー、サラミス、プラテヤ等の世界有數の大戰爭は戰はれたのであつて、彼に對して希臘方に在てはセミストークルス、アリスタイデス等の愛國者、レオニダス、パウサニアス等の勇將が起つたのである、爾うして時の文明世界に斯かる大擾亂を惹起せし大王ゼルキゼスは歴史上では印度よりエテオピアまでの百七十二州を治め、一呼の下に二百萬の大兵を召集するを得しといふ大王であつたが、然しながら此以士帖書の記事に由て彼れ大王の宮廷の裏面を覗き見れば彼は一個の白痴が金の冕を戴きしに過ぎない人物であることが判つて、史上の大王は忽にして家庭の小人と變じ、我等之を讀む者をして轉た悲歎の念に堪えざらしむるのである、予自身に取りては此以士帖書が他の事を敎へて呉れないでも東洋君主たる者の家庭的生涯を明白地に示して呉れた丈けでも大なる福音である、是れを追從的歴史家の書いた歴史に於て讀めば東洋的君主の生涯とては「芙蓉帳暖度ニ春宵。春宵苦短日高起」などゝ言ひて如何にも優美であるやうに思はれるが、然しながら之を希伯來人の飾りなき文章に綴れば「アハ

シュエロス酒のために心樂み」(一章十節)とか、又は「王怒り酒宴の席をたち」(七章七節)などゝありて彼れ大王も酒の奴隷となりては普通の醉漢と何の異なる所なく、醉に乘じて無理の要求を持出し、終に后を辱かしむるに至りし狀態は實に事實其儘である、爾うして百七十二州を統治せし大王の生涯を書くに、(而かも大王の治世に程遠からぬ時に)斯くも自在に筆を運ばした以士帖書の著者は決して今日普通世に稱する文學者の類でないことが判明る。

大王自身は斯くも「史上の大王で家庭の小人」であるとして、大王を繞圍て居つた人等は何んな人物であつたらう乎、「王の前に事ふる七人の侍從メホマン、ジスタ、ハルボナ、ビダク、アバグタ、セタル及びカルカス」など稱へし人等は(一章十節)其當時に在ては大王の寵臣であつて、忠臣である愛國者であると云はれて世に持囃された人物であつたらう、然るに彼等が王に勸めし事がらに由て彼等を評すれば、彼等は王に對し少しも誠實の念を懷かない人等であつて、彼等は自己の怨恨を晴さんが爲めには廢后の沙汰をさへ王に獻言するに躊躇しない人等であつた、殊に時の總理大臣とも稱

すべきハマンに至りては心に名利の外一物を蓄へない人物であつて、君寵一たび衰へし曉には何の取所もない極く詰らない人物であつた、爾うして斯かる價値なき無能漢が國務樞要の地位に立ち億兆の生命與奪の權を握つて居つた事を思ふ時に、東洋風の政治なるものは如何に危險極まるものであるかゞ面前に示されて、我等之を讀んで莊嚴を飾る宮廷の生涯は神の前とは云はずとも、史家の裁判にかけても何んと卑しいものであるかを覺るのである、以士帖書は其一面に於て東洋的政治の裏面の曝露である、之に由て波斯大帝國の基礎ですら虛の虛なる者である事が示されたのである、サラミス、プラテヤの戰場で大敗を取りし所以のものは波斯軍を指揮せしアルタバザス、マルドニアス等の將官の無能に於て在つたのではなくして、遠くシュシャン城內九重雲深き邊の奢侈姪縱懦弱に於て在つた事が解かる、斯くて舊約聖書中の以士帖書は之を史學の太祖ヘロドータスの著に成る希臘史と併び讀んで一つの大なる福音書となるのである。

今東洋人の模範たる波斯人を離れて常に自由の空氣を呼吸し來りし希伯來人の事蹟を

稽へ見ん乎、兩者の間には殆んど天壤も啻ならざる差別のあることが分かる、卽ち阿諛、佞奸、追從、諂媚の術の外、何事をも知らざりし波斯國の朝臣等に對して、希伯來人たりしモルデカイを較べ見ん乎、我等は彼れモルデカイに於て今より二千四百年前の往昔に一人の自由の人を見るのである、滿朝擧つて權に阿り威に屈服する時に方つて玆處に一人の腰を曲げざる人が居たのである。

王の門にある王の諸民みな跪きてハマンを拜せり、是は王斯く他になす事を命じたればなり、然れどもモルデカイは跪かず又たこれを拜せざりき……ハマン、モルデカイの跪かず、また己れを拜せざるを見たればハマン忿怒に堪へざりき(第三章二五節)、と。

時の文明世界の半分以上に君主たりし大王の寵臣の忿怒を買ふも自己の人たるの威權を瀆さなかつたといふモルデカイは確かに太古時代に於ける自由の主唱家であつて、英のハムプデン、米のワシントン、リンコルン等の先驅であつた、然れば彼れモルデカイが王に對して不忠不實の人でありしかと云ふに決して爾うではなかつた、彼は

王を暗殺せんとする隱謀あるを聞知して、直に之を王に密告するの途を取つた(六章一、二、三節)、彼は佞人ハマンに對しては少しも屈しなかつたが、王に對しては少しも非禮の行爲に出でなかつた、殊に共從妹なるエステルを養育し、常に彼女の庇保人の地位に立て、少しも自己のために求むる所なかりしが如きは彼が今日所謂るゼントルマンでありしことを證するに足る(一章七節、仝十一節等參考)、之に較べて見て敵としてゼルキゼス王を迎へし雅典スパルタの勇士等が彼に對して反對獨立の態度に出でたのは敢て賞するに足りない、モルデカイは宮廷に在て、而かも東洋風の跪服諂從の渦中に在て獨り儼然として人たるの彼の威權を維持したのである、彼は確かに主義の勇者である、此點に於ては、エリヤ、ダニエルにも劣らない信仰の戰士である、爾うして自由の微塵だも解しない二千四百年前の波斯朝廷に在て、自由のために斯くも大膽なる對立を爲したるモルデカイを產出したものはイザヤ、エレミヤ等の說いたエホバの宗敎を除いたる他のものではなかつた。

以士帖書の女主人公は勿論**エステル**女である、彼女はもとハダッサと稱びて彼女の從

兄に當るモルデカイに養育られた者である(二章七節)、エステルの名は彼女がアハシユエロス王の后となつた後で與へられたものであつて、是はバビロン人の崇拜した女神イスター(Istar)の名を取て附けたものである、(『興國史談』バビロニアの章參考)、其顏貌の美を賴んで縱令大王なればとて異敎信者の妻妾の一人に擧げられたことは猶太人の理想から云へば大に非難すべき所であるが、然し既に百餘年の間他國の捕虜となり居りし國民中の婦女子の爲した事として見れば、是れ亦左程に責むべきことではないと思ふ、「沒藥を用ふること六ヶ月、また各樣の薰物及び婦人の潔淨事にあつる物などを用ふること六ヶ月」(二章十二節)とは嬋妍たる彼女の姿を面前に見るやうであつて、彼女に別に何にか犯かすべからざる所があつたとは少しも思はれない、彼女はたゝ顏貌いとも麗はしき從順なる愛らしき猶太婦人であつたのであらう、然しながら彼女も猶太婦人であつたから波斯朝廷の後宮佳麗三千人とは自づから質を異にした、メリアム、デボラ、ヤエル等の賢婦人を出した猶太民族の中に生れしエステルは身は錦繡に纏はれて君王の側に侍べるに至ても彼女に何處にか氣丈とした所があつ

た、猶太人は凡て愛國者である、爾うして國のためとあれば其婦女子も身命の危きを省みない、纖弱なるエステルも彼女の同胞を救はんが爲には彼女に取ては最大の危險を冒した、以士帖書の美はエステル女が猶太民族救濟の請願を齎らしてアハシュエロス王の前に出でし時の記事に於て中集して居る(五章一、二、三節)、此時に於ける彼女の心の中の苦しさは如何ばかりでありしならん、

王の諸臣及び諸州の民みな知る、男にもあれ、女にもあれ、凡て召されずして內庭に入て王に到る者は必ず殺さるべき一の律法あり、されど王これに金圭を伸れば生くるを得べし(四章十一節)、

壓制國の法律として今日から見れば實に笑ふに堪へたるものであるが、然し其下に立ちしエステルに取ては之を犯かすは死生の問題であつて、非常の決心を爲すにあらざればアハシュエロス王の忿怒を冒して彼に近くことは出來なかつた、モルデカイが猶太民族の危急を告げて彼女の決心を促がせし言辭は聖書中有名なる者の一つである、

汝若し此時に方りて默して言はずば他の處よりして助援と拯救ユダヤ人に興らん、

然れど汝と汝の父の家は亡ぶべし、汝が后の位を得たるは此の時のためなりしやも知るべからず(四章十四節)、

遠慮深さは女の常性である、殊に獨り異教信者の中に在て特種の宗教を信ずる事であれば一歩を誤てば同輩の嘲を招くのみならず、彼女の場合に於ては位を失ひ耻辱の最期を遂げなければならない、上の者は下の者の心を知らないが、亦下の者も上の者の心を知らない、斯かる場合に於ける大宮人の心は大宮人ならでは判らない、若しエステルが普通の婦人であつたならば彼女は獨り自己の心に言ふたであらう、

妾は纖弱き婦人の身であれば獨り自己を愼みて婦女たるの道を盡せば足る、何んぞ進んで國事に干與し、我が國民のために竭すを須ゐん、是れ男子の爲すべき事にして女子の關する所にあらず

と、然しながらそこが猶太婦人である、神の民のためとあれば彼女は身命を捨てなければならない、彼女は猶太教の趣意に循ひて爾う教育されたのである、「汝にして今默して言はずば他の處よりして助援と拯救ユダヤ人に興らん」と、或は天の星を以て

してか、或は路傍の石を以てしてか、神は其選民を救ひ給はん、「汝が后の位を得たるは此の時のためなりしやも知るべからず」と、是れエステルに取ては實に强い勸告の言辭であつた、「汝が后となりしは綺羅粉黛に身を飾らんがために非ず、亦瑤車に乘りて萬人の崇拜を受けんが爲めにあらず、皇后たるも宮女たるも猶太婦人に取りては神と同胞とに對して盡すべきの職責を盡さんためなり」と、此天職の觀念がありて、以士帖書も亦確かに聖書の中に入るべきの價値ある書であることが判る、神の選民ならでは、皇后たるは身を神と同胞とのために献ずるための大なる責任の地位であるとの事は解らない。

故に皇后エステルは終に意を決し返辭をモルデカイに送つた、

エステルまたモルデカイに答へしめて曰く、汝往きてシュシャンにをるユダヤ人を悉く集めて我がために斷食せよ、三日の間夜晝とも食ふことも飲むこともする勿れ、我と我が侍女等も同じく斷食せん、而かして我れ律法に背く事なれども王に到らん、我もし死ぬべくは死ぬべし(四章十五、十六節)、

優しくもあり、健氣にもある、彼女に祈禱の精神がある、亦た彼女に死を決したる心がある、

勿レ謂裙釵料レ事危　陽氣向處山可レ摧
勿レ謂妙齡不レ堪レ才　至誠固有ニ鬼神知一

此至誠と決心とがありて何事も成らんことはない、纖弱なるエステルも斷食と決心とに依つて勇者となつた、彼女は終に王に近づいた、爾うして彼女のなすべき事を爲し遂げた。

エステルいひけるは王もし之れを善とし給はゞ願くはシュシャンにあるユダヤ人に允して明日今日の詔旨の如くなさしめ、且ハマンの十人の子を木に懸けしめ給へ、王かく爲せと命じシュシャンにをいて詔旨を出せり、ハマンの十人の子は木に懸けらる、アダルの月の十四日にシュシャンのユダヤ人また集まりシュシャンの内にて三百人をころせり、然れども其所有物には手をかけざりき、王の諸州にあるそのユダヤ人もまた相集まり、立ておのれの生命を保護し、その敵に勝て安んじ、おのれ

を惡む者七萬五千人をころせり、然れどもその所有物には手をかけざりき（九章十三—十六節）。

是れは勿論キリストの精神ではない、是れは目にて目を償ひ齒にて齒を償ひ、爾の隣を愛みて其敵を憾むべしと言ふ舊約時代の古い精神である、我等は勿論是を學ぶの必要はない、然しながら其時代に在ては最も危險なる場合より、ユダヤ人が、皇后の地位に上げられし此一婦人エステルの英斷に由て救はれしと云ふ一事に至ては、是れ其中に深い攝理の籠つて居る事であつて、我等は能く此記事を翫味して深き眞理に接することが出來る。

士師エフタ

少女の犧牲

士師記第十一章の研究

我れ更らに何を言はんや、若しギデオン、バラク又サムソン、エフタ、ダビデ又サムエル及び預言者の事を言はんには時足らざる也。希伯來書十一章三十二節。

エフタの話は舊約聖書士師記第十一章に載せてある、彼はギレアデ人で猛き勇者であつた、私生兒であるとの故を以て、本妻の子等の逐ふ所となり、家鄕を去りて他國に流浪し、トブと云ふ所に往いて、其處に土地の無賴漢等を集め、アラビヤ地方に時々行はるゝ所の旅客の掠奪に從事した、時に彼の本國はアンモン人の侵掠に會ひ、十八年の間其暴虐に困しんだ、玆に於てかギレアデの長老等トブの地に到り、エフタに乞ふに其生國に歸り、民を率ひてアンモン人に當り、民國を侵掠者の手より拯出さんことを以てした、時にエフタは長老等に答へて曰ふた、

汝等は我を惡みて我父の家より我を逐出したるに非ずや、然るに今汝等困難める時に至りて何ぞ我に來るや

と（七節）、私生兒も亦人である、一たび世に生れて來た以上は、神に召されて生れて

來た者である、然るに私生兒なるとの故を以て之を嫌惡ひ、之を虐待し、之を逐放して、ギレアデ人は人の前に自己の清淨を衒ふたのである。

然るに神は智者の智を愧しめ、賢者の賢を愧かしめんために、玆に私生兒エフタを選みて彼に異常の能を與へ給ふたのである、今や國難に際し救濟の衝に當る者なきに至りて、民の長老等は頭を低れ、彼等が曾て侮辱し、逐放せし不幸兒の援助を藉らざるを得ざるに至つた、エフタの得意實に想ふべしである、時に長老等エフタに答へて曰ふた、

其事ありしが故に我等今禮を厚うして汝に來りしなり、乞ふ、汝今我等と共に往きてアンモン人と鬪へ、然らば我等汝を戴きてギレアデ人の首領となすべし

と(八節)、此懺悔と懇願とに對し、勇者は之を斥くるを得なかつた、長老等をしてエホバの前に誓約を立てしめ、終に彼等の首領となり、大將となり、ギレアデ人を率ひて敵人アンモンを擊攘すべきことを承諾した。

エフタはギレアデ人の首領となりて、アンモン人に對して直ちに戰鬪を開始しなかつ

た、彼は先づ平和手段を以て爭鬪の根を絶たんとした、彼は使者をアンモン人の王に遣りて其要求の非を糺し、彼をして讓るべきを讓らしめんとした、本章第十二節より第二十八節までは、當時の外交談判を記す者である、ギレアデ人の立場より見て正當なる要求であつたのであらう、外交など云ふ者は其時其場合に臨んでのみ興味ある者である、然し時と所とを異にして何の興味も無い者である、其當時に於てこそ日露外交談判と云へば世界の耳目を惹いたが、然し今より四千年の後に至りて之を見れば、丁度我等が今エフタ對アンモン王の外交談判を讀むやうな感がして、誠に詰らない事であらう、然しエフタが戰ふ前に先づ平和的手段を取りしこと、其事は文明的であつて賞讃すべき事である、彼れ私生兒の浮浪人も之れに責任の地位を與ふれば紳士となる、神を識りしエフタは其素性如何に關はらず、性來の紳士であつた、之に軍國の指揮を委ぬれば直に陣頭に立て、勇敢以て敵の膽を挫ぐならんと思ひの外、エフタに優しき女らしき所があつた、我等がエフタを愛する理由は主として玆にあるのである。

エフタは平和の方法を試みた、然しながらギレアデ人の力を侮りしアンモン人の王は

不作法にも之を斥けた、

茲に至りてエホバの靈エフタに臨みたり

とある(二十九節)、戰鬪の力は平和の手段の盡きる時に降る、エフタは今は鬪はざるを得なかつた、然れども彼は戰場に臨むに先だちて神に誓を立てざるを得なかつた、彼の擔ひし責任は餘りに重大であつた、彼は自己の力に賴るを得ず、然ればとて未だ全く神の援助を信ずることが出來なかつた、誓願は人の至情より出る者であるが、然し全く神に賴む人は誓願を立つるの必要を感じない、天父の聖旨を完全に了解り給ひしイエスは曾て一回も誓願を立て給はなかつた、彼は其弟子等に敎へて曰ひ給ふた、

我れ汝等に告げん、更らに誓ふこと勿れ、天を指して誓ふこと勿れ、是れ神の座位なれば也、地を指して誓ふこと勿れ、是れ神の足凳なれば也、エルサレムを指して誓ふこと勿れ、是れ大王の京城なれば也、汝の首を指して誓ふこと勿れ、そは一絲の髮だに白く又黑くすること能はざれば也、汝等たゞ然り、然り、否な、否なと言へ、此より過るは惡より出るなり

と(馬太傳五章三十四節以下)、此は神を信ずること深きの餘り誓願の必要を認めざるのみならず、却て其罪惡なるを認むる聖者の言である、然れども神の子ならぬエフタには此深き完全き信仰がなかつた、彼は多くの人の子の例に倣ひ、戰鬪に臨むに際して神の前に誓を立てた、此場合に在りしエフタに對し、余は其行爲を讃むる能はざると同時に、又深く彼に同情を表せざるを得ない。

エフタがエホバに立てし誓は是れであつた、卽ち

汝若し誠にアンモン人を我が手に附し給はば、我がアンモン人の所より安らかに歸らん時に、我家の戸より出で來りて我を迎ふる者は必ずエホバの所有となるべし、而して我れ之を燔祭となして獻げん

と(卅、卅一節)、誠に前後を顧みざる無謀の誓であつた、然しエフタは時に必要に逼まられ、自己の弱きを感ずるの餘り此言を發したのであると思ふ、我等はエフタの輕卒を責むる前に先づ自己を彼の地位に置いて見なければならない、彼に取り今や彼の私事を慮るの時ではなかつた、國の爲め、神の爲め、然かも自己は一個の浪士、娼

妓の子なりとして人に賤められし者、彼れ爭でか此大任に堪ゆるを得んや、彼れ若し一歩を錯れば國家は滅亡の淵に沈まざるを得ず、此事を思ふて、彼は如何なる犧牲を拂ふも此戰爭に勝たざるべからずと思ふたのであらう、余は此時に於ける彼れエフタの心情を推量りて同情の涙に堪えない。

上よりの力は彼の身に加へられた、誓願はエホバの前に立てられた、今やエフタの勇氣平日に百倍し、彼は猛然としてアンモン人の陣を襲ふた、

ヱフタ卽ちアンモン人の所に進み行きて之と戰ひしに、エホバ、彼等を其手に附し給ひしかば、アロエルよりミンニテにまで至り、彼等の二十の邑を打敗りてアベルケラミムに至り、甚だ多くの人を殺せり、斯くてアンモン人はイスラエル人に征伏せられたり

とある(卅二、卅三節)、殺伐の記事を好まざる聖書記者は此場合に於ても是れ以上を書き記さなかつた、戰爭の記事は是れで充分である、斬つたとか、突いたとか、喊いたとか、叫んだとか云ふ血腥き事は之を讀むの必要はない、士師記の如き戰爭に就て

多くを記す書に於てすら聖書は戰爭其物に就ては成るべく沈默を守つて必要以上を語らない、是れ聖書の聖書たる所以であると思ふ。

戰爭は大勝利を以て終つた、强敵は征伏せられた、民の自由は回復せられた、而して勇者は凱旋の榮光を擔ふて其家に歸つた、

越王勾踐吳を破て歸る、
義士家に還て盡く錦衣、

此世の榮譽にして凱旋の榮譽に優る者はない、ヱフタは今やアンモン人の王を破て錦衣を纏ふてミズパなる其家に還て來た、然るに視よ、何事ぞ、先づ第一に彼の家を出て彼を迎へし者は彼の一人の女であつた、彼女は嬉しさの餘り手に鼓を執り舞ひ踊りながら彼女の父の凱旋を迎へた、而して彼女はエフタの獨子で獨娘であつたのである、

嗚呼運命！　之を見しエフタの心は倏忽にして歡喜の天より悲哀の地に隕た、彼は彼の衣を裂いた、「我が女よ」と彼は叫けんだ、

汝は眞に我を仆せり、汝は我が殃災の源となれり

と彼は續いて言ふた、嗚呼如何せん、誓願の言は既に發せられたり、今は之を撤回すべくもあらず、彼は彼の一人の娘を燔祭としてエホバの前に獻げざるべからず、嗚呼高價なる勝利、敵を破り國を救ふて其代價として一人の女を獻げざるべからずと、此時のエフタの心は亂れて糸の如くであつたらう。

然し有繋にイスラエルの國士の女であつた、彼女は其父に此の誓願のありしことを聞いて少しも驚かなかつた、彼女は曰ふた、

お父さん、驚きなさるな、貴父がエホバに向ひて其誓を立てられしならば、其通り私に爲さい、神様は貴父を援けて貴父の敵なるアンモン人に勝たしめ給ひました、と(卅六節)、健氣なる彼女は彼女の父の敵に勝ちしと、彼女の國の救はれしとを聞きて、彼女の身に臨みし大なる殃災を感じなかつた、彼女は喜んで父と國との犧牲となりて神の祭壇の上に獻げられんことを求めた、彼女に唯一つの願があつた、それは彼女が死の準備を爲さんことであつた、彼女は父に向て曰ふた、

お父さん、何卒此事を私に允して下さい、何卒二ヶ月の間私に暇を下さい、私は其

間に私の友等と共に山に往きて、私が處女として身を終ることを歎かふと欲ひますと(三十七節)、さうして父の許可を得て山に往き、二ヶ月滿て後に彼女の家に歸り來りたれば

父其誓ひし誓願の如くに行へり

とある(三十九節)、多分誓の言葉通りにエフタは彼の女を燔祭の犧牲として獻げたのであらうとの事である。

殘酷と云へば殘酷である、往昔アブラハム、其一子イサクを燔祭として神に獻げんとせし其刹那に、神は一頭の羊を下して、之をしてイサクに代らしめたとの事である、(創世記第廿二章)神は何故に同じ手段を以て玆にエフタの女を救ひ給はなかつたのであらう乎、人身御供は聖書の堅く禁ずる所である、エフタが若し玆に此事を爲したとすれば、是れ神の律法に反いたのである、故に或る聖書の註解者は言ふ、エフタは玆に文字通りに彼の女を燔祭として神に供へたのではない、往昔のアブラハムの例に倣ひ、羔か犢を以て彼女に代らしめ、彼女の生命は之を保存し、彼女をして終生聖童

として神の聖殿に事へしめたのであると、或ひはさうであつた乎も知れない、然し第三十九節を其まゝに解釋して之を文字以外に解釋することは出來ない、多分エフタは彼の誓願通りに彼の女の身を處分したのであらう、前にも述べたやうに、誓願其物が既に間違であつたのである、其成就は敢て怪むに足りない、我等はエフタの迷信を憐むであらう、彼の淺慮を責むるであらう、然しながら彼の誠實を貴び、彼の志を愛せざるを得ない。

然し燔祭の事實は如何でありしとするも、犧牲の事實は之を蔽ふことは出來ない、エフタは玆に凱旋の歸途に於て彼の一人の女を失つたのである、此事に由て彼の昂りし心は低くせられ、誇らんとせし心は遜だらされたのであらう、エフタは此時眞の榮譽なる者の此世に無いことを覺つたのであらう、此世に於て曇りなき歡喜、缺なき成功、涙なき名譽なる者は無いのである、エフタは流浪の身より一躍して一國の首領と成りし時に、償はんと欲して償ふ能はざる損害に遭遇したのである、彼は此後六年間イスラエルとギレアデを審いたとある(十二章七節)、然し六年の榮華は彼に取り決して悲

哀なき榮華では無かつたのである、彼は終生凱旋當日の悲劇を忘れなかつたに相違ない、アンモン人の王を睨みし勇者の眼は度々悲しき犧牲の事を想出して熱き涙に浸されたに相違ない、彼は度々ギレアデの首領とならずして、トブの地に彼の一人の女と共に匿れて幸福なる日を終生送りしことを願ふたであらう。

然し幸福は人生最大の獲物ではない、義務は幸福に優さりて更らに貴くある、義務の故に我等は度々幸福を棄てざるを得ない、而して義務のために我等の蒙る損失は決して損失でないのである、エフタは彼の幸福を犧牲に供して彼の國を救ふた、而してエフタの女は彼女の生命を犧牲に供して彼女の父の心を聖めた、犧牲に犧牲、人生は犧牲である、犧牲なくして人生は無意味である、幸福は人生の目的ではない、犧牲こそ人生の華である、若しイスラエルを救はんがためにエフタの苦痛が必要であり、而してエフタ自身を救はんがために彼の女の死が必要でありしとならば(而して余は必要でありしと信ずる)、神の聖名は讃美すべきである、エフタは無益に苦しまず、彼の女は無益に死なかつた、神は斯くの如くにして人と國とを救ひ給ふのである。

是れより後年々にイスラエルの女子等は往きて年に四回ギレアデ人エフタの女のために哀哭くことをなせり、是れイスラエルの規定となれり

とある(四十節)、單に哀哭の表彰と見て此規定は無意味である、然し是れ單に感情のみの哀哭ではない、貴き主義の籠る哀哭である、エフタの女は國のために、又國のために戰ひし彼女の父のために其處女の身を神の祭壇の上に獻げたのである、さうして年毎に彼女の死を記憶してイスラエルの女子等は貴き犧牲の精神を養ふたのである、聖書の載する多くの話の中にエフタと其一人の女の話は無量の感慨を我等に與ふる物である。

聖詩譯解

『鹿の溪水を慕ひ喘ぐが如く』

詩篇第四拾二、四拾三篇

第四十二篇　第一段

1 ア、神よ、鹿の溪水を慕ひ喘ぐが如く
我が靈魂は汝を慕ひ喘ぐなり、

2 我が靈魂は渴ける如くに神を慕ふ　活神をぞ慕ふ、
何れの時にか我れ行きて神の聖前にいでん、

3 彼等が終日我に向ひて汝の神は安にありやと罵る時に
我が涙は晝夜灑ぎて我が糧なりき、

4 我れ昔し群をなして祭日をまもる衆人と偕に行き、
歡喜と讃美の聲を揚げて彼等を神の家に伴へり、

今是等の事を追想して我が衷より靈を注ぎ出すなり。

5 アヽ我が靈魂よ、汝何ぞ頂低るゝや、
何ぞ我が衷に思亂るゝや、
汝神を待望め、そは我に聖顏の扶助ありて
我は尙ほ我が神を讃稱ふべければなり。

第二段

6 アヽ我が神よ、我が靈魂は我が衷に頂低る、
然れば我れヨルダンの地より、ヘルモンより
ミザルの地より汝を想ひ出づ、

7 汝の大瀑の音響に因りて淵々呼應へ、
汝の波、汝の洪波悉く我が上を越へ行けり、

8 然かはあれど晝はエホバその憐憫を施し給ひき、
夜はその歌我と偕にありき、

此歌は我が生命の神に捧ぐる祈なりき、

9 故に我れ我が磐なる神に言はん　何ぞ我を忘れ給ひしや、
何ぞ我は仇の暴虐に依りて泣き悲しむやと、

10 我が骨も碎くる斗りに我が敵は我を罵れり、
彼等は終日我に向ひて言へり「汝の神は安にありや」と。

11 アヽ我が靈魂よ汝何ぞ頂低るゝや、
何ぞ我が衷に思亂るや、
汝神を待望め、そは我は我が顏の扶助なる
我が神を尙ほ讃稱ふべければなり。

第四十三篇　第三段

1 神よ願くは我を鞫き情を知らぬ民に對ひて我が訟を論ひ、
詭詐多き邪惡なる人より我を救ひ出し給へ、

2 汝は我が力の神なり、何ぞ我を棄て給ひしや、

何ぞ我は敵の暴虐によりて泣き悲しむや、

3 願くは汝の光と汝の眞理とを放ちて我を導き、
汝の聖山と汝の帷幄とに行かしめ給へ、

4 然らば我れ神の祭壇に行き、
又我が歡喜の極なる神に行かん、
アヽ神よ、我が神よ、我れ琴をもて汝を讃たゝへん。

5 アヽ我が靈魂よ汝何ぞ頭低るゝや、
何ぞ我が衷に思亂るゝや、
汝、神を待ち望め、そは我は我が面の救拯なる
我が神を讃稱ふべければなり。

略註

神の聖殿より逐はれ、其聖き會合に參する能はず、獨り不信者の中に在りて其嘲弄罵

詈に身を窘められ、遙かにシオンの彼方を望んで懷舊の情を述べし歌なり。

○(四十二篇の一)靈魂は女性はり、故に之を塵に譬ふ○(三)「涙を糧とす」悲痛の極なり○「靈を注ぎ出す」抑へ切れずして感情を外に表はすの意○(六)「ヨルダンの地……ヘルモン……ミサル」パレステナの東北隅なるヨルダン河の源近き地の名稱なり、此詩の作者は聖殿の所在地より逐はれて此處に在りしが如し○(七)衷心の艱苦を附近の大瀑に譬へて云ふ、瀑布轟然として淵々を壓するが如く患難の洪波は我が靈を壓すとの意○第一段より第三段に至るまで信仰に進歩あり、始めは苦痛を訴ふること多くして、終りは歡喜と讃美とを以て充ち溢る、神を信ずる者の艱難に遭遇する時の實驗を寫し得て餘す所なし。

ダビデの弓の歌

撒母耳後書一章

19 イスラエルよ、汝の榮耀は汝の高き所に殺さる、
嗚呼勇士は仆れたるかな。

20 ガデに此事を告ぐる莫れ、
アシケロンの街に此事を傳ふる勿れ、
恐らくはペリシテ人の女等喜ばん、
恐らくは割禮を受けざる者の女等樂しみ祝はん。

21 ギルボアの山よ、願くは汝の上に雨露降らざれ、
亦供物の田園もあらざれ、
そは彼處に勇士の干は汚されたればなり、
膏を沃がれたるサウロの干は汚されたればなり。

22 其殺せしものゝ血を飲まずして
ヨナタンの弓は退かざりき、
勇士の脂を食はずして
サウロの劍は空しく歸らざりき。

23 サウルとヨナタンとは生きて偕に相愛し、相樂めり、
而して彼等は死して相離れざりき、
二人は鷲よりも捷かりき、
彼等は獅子よりも强かりき。

24 イスラエルの女等よ、サウルの爲に泣けよ、
彼は絳き衣を以て汝等を華麗に粧ひたりしにあらずや、
彼は金の飾を以て汝等の衣に着けたりしにあらずや。

25 嗚呼勇士は戰の中に仆れたるかな、

26 汝の高き所に殺されたるかな、嗚呼ヨナタンよ。
我は汝のために悲慟む、兄弟ヨナタンよ、汝は我に甚だ優しかりき、
汝の我をいつくしめる愛は尋常ならず、
是れ婦人の愛にも優る愛なりき。

27 嗚呼勇士は仆れたるかな、
戰の具は失せたるかな。

略註

ダビデが其敵サウロ、其友ヨナタンの戰死を歎きし歌なり、ダビデの愛國心は今や彼の私怨に勝ちて彼は彼の敵人のために茲に悲歎の聲を揚げざるを得ざるに至れり、神と國との爲めに盡す時に私怨は化して友愛となる、此の詩一言の神に及ぶことなしと雖も、詩人の寛容大度を示すに於て確かに聖詩の一なるを自證す。

(十九)國の勇士は其榮耀なり、ギルボヤ山上に殺されしが故に「高き所に殺さる」といふ、而も是れ亦榮譽の戰死を祝するの語なり○(二十)ガテとアシケロンとはペリシテ人の城市也、我勇士の訃音の敵地に達せざらん事を望むと、是れ愛國者の眞情なり「割禮を受けざるもの」とはイスラエル人より見たる異邦人の稱なり○(廿一)次にギルボアの山を詛へり、汝何故に我勇士を防ぎ護らざりしやと、「干は汚さる」とは勇士の最大恥辱也、「膏を沃がれたるもの」とはイスラエルの王の尊稱なり○(廿二)サウロ父子の剛勇を頌讃せし句也○(廿三)父子の膠漆も啻ならざる情を寫せり、而かも父なる者は詩人の讎敵にして子なるものは彼の骨肉にも優る親友なりき○(廿四)父なる讎敵の爲に此聲を發す、イスラエルの女子に訴へて彼の爲めに哀歌を揚げしむ、曰ふ、彼れサウロは特に汝等を思へり、彼は幾度か生命を賭して奪ひ來りし戰利品を以て汝等を粧ひたりと○(廿五、廿六)而も詩人の悲哀は特に彼の親友のために發せらる、彼は繰返して曰ふ「勇士は戰の中に仆れたるかな」と、ヨナタンは優しかりし、彼の愛は婦人の愛に勝れりと、世の友情を歌ひし詩にして斯くも熱切なるものあるなし○

(廿七)終尾の覆唱詞なり、勇士は「戰の具なり」、干城なり、彼れありて國家は泰きなり、此節を拉典語に譯せしものは左の如し

Quomodo ceciderunt robusti,
Et perierunt arma bellica.

是れ往々歐洲諸國に於て戰死者の墓標の上に見る聯句なりと云ふ。

『我れ山に向ひて目を擧ぐ』

詩篇第百廿一篇

1 我れ山に向ひて目を擧ぐ
我が扶助は何處より來るや、
2 我が扶助はエホバより來る、
天地を創造り給へるエホバより來る。

3 エホバは汝の足を搖がせ給はざる乎、
汝を守る者は微睡み給ふことなき乎。
4 視よイスラエルを守る者は
微睡むこともなし、寢ることもなからん。
5 エホバは汝を守る者なり、
エホバは汝の右手を蔽ふ蔭なり、
6 晝時は日、汝を擊たじ、
夜間は月、汝を害はざらむ、
7 エホバは諸〳〵の禍害より汝を守り、
また汝の靈魂を守り給はん。

略註

詩人目を擧げてエホバの甚なる聖き山(詩篇八十七篇一節)を望み、自から心に問ふて曰ふ「我が扶助は何處より來るや」と、彼は直に己に答へて曰ふ「我が扶助は天地を造り給へるエホバより來る」と、神は高き所に在ます、然かも扶助は山より出づるに非ず、拜すべく仰ぐべきものは山にあらずして神なり。

時に或人は詩人に問ふて曰へり、「エホバは確かに汝を守る者なる乎、彼の微睡み給ふ虞なき乎」と、詩人は直ちに彼に答へて曰く、「否な、イスラエルを守る者は微睡むことも寢ることもなし」と、エホバは他神の如き者に非ず、彼は假寢て醒さるべきが如き者に非ず(列王紀略上十八章廿七節)、彼は亦世の番人の如き者に非ず、彼の擁護は日夜絶ゆる間なしと。

時に傍人擧て詩人の信仰を贊して曰く「エホバは汝を守る者なり云々」と、此の詩、疑惑を以て始まり、是認を以て起ち、堅信を以て終る、言を傍人の疑問と贊同とに託

して能く詩人の信仰の上進を示す、其優秀精美は萬世の齊しく稱揚する所なり。○「右手を蔽ふ蔭」右手は能力の存する所、蔭は之を蔽ふ楯なり、エホバは能力を賜ひ又掩護を賜ふ○晝は日射病に打たるゝの患なし、夜は外氣に侵されざるべし、古人は沼瘴毒の如きは月より出づる者と思へり○「靈魂」は人の生命其物なり、テサロニカ前書五の廿三に於ける「全靈、全生、全身」の謂ひなり、人の中心的生命、死して死せざる者、エホバの特に守り給ふものは是れなり、彼れ我が靈魂を守り給ふ、故に我れ死すとも怕れざるなり○「出ると入ると」とは外なる活動の生涯と內なる靜肅の生涯となり、外に在ては敵人嘲罵の中に在るもエホバは我を守り給ひ、內に在りては家庭親愛の中に臥する時もエホバは我を護り給ふとなり、申命記々者は云へり「汝は入るにも福祉を得、出るにも福祉を得べし」と(廿八章六節)、エホバに依り賴む者は彼の從事する事業の大と小とを問はず凡て其祝福に與かるなり。

『エホバは我が光なり』

詩篇第廿七篇

1 エホバは我が光なり亦我が救なり、
我れ誰をか恐れん、
エホバは我が生命の砦なり、
我れ誰のためにか戰慄かん。

2 惡人襲ひ來りて我が肉を啖はんとせし時に
我が敵、我が仇、我に近づきし時に
彼等は躓き且つ仆れたり。

3 縱令萬軍我に對ひて陣を張るも
我が心は怕れじ、

縱令戰爭我がために起るも
我に尙ほ恃む所あり。

4 我はたゞ一事をエホバに乞へり、我は之を求む
我は終生エホバの家に在りて
其美を仰ぎ、其宮を窺はんことを。

5 然れば艱難の日に假廬の中に我を潛ませ、
其幕屋の奥に我を隱くし、
我を高く巖の上に置き給はん。

6 今我が首は我を繞れる我が敵の上に擡げられん、
我はエホバの宮に在て歡喜の供物を獻げん、

我は謠ばん、然り、エホバに讃美の歌を奉らん。

* * * * * *

7 エホバよ、我れ聲を揚げて叫ぶ時に我に聞き給へ、
我が上に憐憫を垂れて我に應へ給へ。

8 「汝等我が面を求めよ」と宣ひし時に
「エホバよ我は汝の聖顏を求めん」と我が心に應へたりき。

9 汝の聖顏を我より背向け給ふ勿れ、
怒りて汝の僕を遠け給ふ勿れ、
汝は我が扶助なりき、我を去り給ふ勿れ、
噫我が救濟の神よ、我を捨て給ふ勿れ。

10 我が父我が母我を捨て去りし時に
エホバは我を拾ひ上げ給へり。

11 我に汝の途を敎へよ、噫エホバよ、
我が敵我を窺へば我を平かなる道に導き給へ。

12 我が仇の所望に我を任かし給ふこと勿れ、
そは讒人我に逆ひて起ち我がために狂暴を吐けばなり。

13 我れ若し生ける者の地に於て
エホバの恩惠を享るの恃なからんには……

* * * * * *

14 エホバを俟望め、

心を強くせよ、彼は汝の心を堅くせん、
我は重ねて曰ふ、汝、エホバを俟望めと。

略註

ダビデの作として一般に認めらる、彼の生涯に此詩に適合する境遇多かりき○(二)「惡人襲ひ來りて我が肉を啖はんとせし時云々」ダビデがペリシテ人ゴリアテに對ひし時に彼れゴリアテが發せし言と其態度とを參考せよ(撒母耳前書十七章)○(四)「終生エホバの家に在らん」とは其殿衛たらんとの意にあらず、「エホバの家に在る」とはエホバと偕に在ることなり、「其美を仰ぐ」とは恒に其聖德を思ふことなり、「其宮を窺はん」とはエホバの眞個の住家なる宇宙の妙美を探らんとの意なり○(五)「假廬」は蔭影のための庇なり、「晝は日汝を擊たじ」との言を對照せよ、「高く巖の上に置く」とは高くして堅き安全の地位に置くを言ふなり○第六節を以て安泰の感を述べ盡し、第七節を以て哀訴に轉ず、而して之を爲すに方て過去の恩惠を回顧して目前の援助を求む、「我

が父我が母我を捨て去りし時」の一句に至りて詩人の熱情は其絶頂に達せり、神の愛は父母の愛よりも大なり、父母は其生みし子を捨つる事あり、然れども神は世の父母が捨て去りし子を捨ひ上げ給ふ、而して詩人は云ふ、我も捨られて又拾ひ上げられし者の一人なりと○第十三節は感動の辭なり、故に完全なる文を成さず、而かも其文を成さゞる所に言ひ盡されぬ情在て存す、噫若し我れエホバの恩惠を知らざらんには、我は斯かる境遇に在りて奈何に成行きしぞと○第十四節に於て信仰の回復あり、詩人は己を勵まして斯く言へり。

『諸の天は神の榮光を顯はし』

詩篇第十九篇

1 諸の天は神の榮光を顯はし、
穹蒼はその手の工を示す。

2 此日言語を彼日に傳へ、
此夜智識を彼夜に送る。
3 語らず言はず其聲聞えざるに、
4 其音響は全地に遍く、
其言辭は地の極にまで及ぶ。
5 神は彼處に帷幄を日のために設け給へり、
日は新郎が祝ひの殿を出るが如く、
勇士が競ひ走るを悦ぶに似たり。
6 其出立つや天の涯よりし、
其運り行くや天の極に至る、
物としてその和煦を蒙らざるはなし。

* * * * * * *

7 エホバの法は完全くして靈魂を活き復らしむ。
エホバの證詞は確實くして愚者を智からしむ。
8 エホバの訓諭は直くして心を欣ばしむ。
エホバの誡命は聖くして眼を快明かならしむ。
9 エホバを愼み懼るゝ道は潔くして世々絶ることなし。
エホバの審判は眞實にして悉く正し。
10 是を黃金に較ぶるも、
多くの純精金に較ぶるも、
彌優りて慕ふべし。
是を蜜に比ぶるも、
蜂の巣の滴瀝に比ぶるも、
彌優りて甘し。

11 汝の僕は是等に由りて懲戒を受く、
是等を守らば大なる報賞あらん。

12 誰か己の過失を知り得んや、
願くは我を隱れたる愆より解放ち給へ、

13 願くは汝の僕を引止めて故意なる罪を犯さしめず、
それを我が主たらしめ給ふ莫れ。
然れば我は玷なき者となりて、
大なる愆より免かるゝを得ん。

14 エホバよ、我が磐よ、我が贖主よ、
我が口の言、我が心の思念をして
汝の前に悅ばるゝことを得しめ給へ。

略註

ダビデの歌として記さる、牧羊の業を執りし彼が獨り曠野に在て天を仰ぎ己が心に鑑みて此歌を作りしとの傳說は甚だ信受し易きものなり○始めに造化に顯はれたる神の偉業を讃し(一節より六節まで)、次に其法に示されたる其威德を頌し(第七節より第十節まで)、終りに其援助を得て心を聖うせんことを祈る(第十一節より第十四節迄)、其造化の偉業を讃するや神を顧びまつるに神(El)の名を以てし、其德を頌めまつるやエホバの聖名を以てす、エルは力の神にしてエホバは恩惠の神なり、而してエホバの律法は素と是れ其恩惠に出でしもの也○哲學者カント曰く「我が上の星の空天と我が衷の道德の法とは是れ恒に新らしき且彌增さる敬虔の念を以て我が心を充たす二つのものなり」と○(一)「諸の天」は諸の天體を指して云ふなり、所謂「天の諸軍」なり他の國民は擧て之を神として崇めし時にヒブライ人のみは之を神の工と做し、神の榮光を顯はすものとなせり○(二)「言語」は讃美なり、「智識」は「說敎」なり、日は日に次ぎて讃美の言語を發し(傳へと譯せられし原語の意義は是れなり)、夜は夜に對して智識を演べ、以て神の威稜を永遠に傳ふ○(三、四)宇宙に聲なし、而かも之に雷霆

の音響の如きものありて其教訓を全地に傳布す○(四、五、六)天體中特に日(太陽)の莊麗を歌ふ、彼れ(太陽)は神の愛子なり、神は彼のために帷幄を設け給へり、彼は新郎の如し、勇士の如し、天涯を走る使者の如し、到る處に和煦の恩惠を分與す○(七—十)然れども殊に頌讃すべきは宇宙に顯はれたる神の機巧に非ずして聖書に示されたる彼の聖旨なり、神は此場合に於ては契約の神、卽ちエホバとして自身を顯はし給ふ、その聖旨の法として布かるゝや、完全にして靈魂を活かすの力あり、證詞として立つや、確實にして迷者の意思を固うするに足る、「訓諭」として傳へらるゝや、之に服從して心に歡喜あり、誡令として示さるゝや、純淸にして之を仰いで眼光明かなり、云々、エホバの法を稱へし言辭にして之に優りて莊麗なるはなし○(十一—十四)エホバの法に則りて大なる報賞あり、是れ「隱れたる愆」を顯はす者、之に由りて人は始めて己の過失を曉り得るなり、最も恐るべきは「故意の罪」なり、若し之をして「我が主たらしめ」ん乎、卽ち我れ若し其支配する所とならん乎、我は終に「大なる愆」を犯すに至らん、「大なる愆」とは何ぞ、他なし、神を背き去ること是なり(以賽

亞書一章三節)、此罪を犯して我は沈淪の子と化するなり、故にエホバよ、我が隱るべき磐よ、我が罪の贖主よ、我が全身を潔らかなる者となして、我が口も我が心も、汝の聖意に適ふものとならしめ給へ。

善惡の差別

詩篇第一篇

1 幸福なるかな、
惡しきものゝ謀畧に歩まず、
罪人の途に立たず、
嘲ける者の座に坐らざる者は。

2 彼はエホバの法を悅び、
日も夜も其法に就て念ふ。

3 斯かる人は水流の邊に植ゑし樹の如し、
期に至りて其實を結び、
其葉も亦凋むことなし、
其作すところ皆な榮えん。

4 惡しき人は然らず、
風の吹き去る粃糠の如し。

5 然れば惡しき者は審判に堪へず、
罪人は義人の會に立つことを得ず。

6 エホバは義しき者の途を知り給ふ、
されど惡しき者の途は滅びん。

略註

此詩何人の作なるや知る能はず、蓋し詩篇全編に附する序言として其卷頭に加へられしものなるべし。

一)「幸福なるかな」詩篇全編に渉る主音なり、詩篇百五十編中幾回となく此語の反覆せらるゝ事あるも、曾て一回も「禍なるかな」の文字の使用せらるゝことあるなし、詩篇は主として歡喜の歌なり、「幸福なる者」の揚げし聲なり○始めに義人の何たる乎を述ぶ、詩人は曰ふ義人は惡人と與せざる者なりと、卽ち彼は先つ消極的に義人なりと、彼は惡人の計略に干からず、罪人と途を偕にせず、神を嘲けり人を譏る者と席を同うせずと、斯くも惡に近づかざる彼はエホバの法を以て彼の自由を束縛する枷なりとは思はず、却て之を悅び日も夜も之に就て念ふと、卽ち彼は消極的に義人なるのみならず亦積極的にも然りとなり、水邊に植えし樹の比喩は南方ユダヤの乾燥の地に在て何人も深く感ずる所なるべし。

(四)義人は斯の如し、然れども惡人は然らず、彼に鞏固なる所あるなし、故に彼は粃糠の如く風と共に飛ぶ、希伯來語にて彼を rāshā と稱ふは「不定」の意なりと云ふ、

惡人は實に主義なき、信仰なき、恒心なき者なり、卽ち今日の謂ゆる俗人なり○(五)彼れ惡人は審判に堪へず、平和の日にありては彼は驕りて世を濶步すと雖も、一朝審判の火の天より臨むあれば彼は草花の熱風に遭ふて枯るが如くに仆る、困難は善惡を識別するための火なり、義人の義も惡人の惡も試練の火を以て顯はさる○惡人は逆境に堪ふる能はず、彼は亦義者の集會の中に立つて長く其席に堪ふる能はず、彼の主張は如何に立派なるも、根本的に不淨陋劣なる彼は義者の會に入つて魚の水中を出しが如き感あり、彼は艱難に堪へず、又義者の會に堪へず、そは彼は幽暗を好む者なればなり○(六)義者の途はエホバ之を知り給ふ、其作すところ皆榮ゆるは之が爲めなり、されど惡人の途は必ず滅びん、そは此途たる是れ惡人自身の取る所のものにしてエホバの知り且つ選び給ふ所のものにあらざればなり。

モーゼの祈禱

詩篇第九十篇

1 主よ、汝は世々我儕の棲家なりき。
2 山いまだ產出ず、
地と土と未だ生れざりし先に、
永遠より永遠にまで汝は神なり。
3 汝は人を塵に歸らしめ給ふ、
亦宣はく「人の子よ、汝等歸來れ」と、
4 汝の目前には千年も今や過ぎんとする昨日の如し、
また夜間の一時に同じ。
5 汝洪水を以て彼等を覆ひ給へば、
彼等は睡眠と化して去る。
亦朝に發出る靑草の如し、

6 朝には發出て榮え、
夕には苅れて枯る。

7 我儕は汝の怒に由りて消失せ
汝の恚に由りて怖まどふ。

8 汝、我儕の愆を汝の聖前に置き、
我儕の隱れたる罪を聖顏の光の中に置き給へり。

9 我儕のすべての日は汝の怒の中に過去り、
我儕のすべての年は氣息の如くに消失せり。

10 我儕の生くる歲は七十に過ず、
縱し壯健にして八十に達することあるも、
されど其誇る所はたゞ勤勞と悲哀とのみ、
其去り逝くこと速にして我等も亦飛去る。

11 誰か汝の怒の力を知らんや、
誰か汝の威嚴に恰ふ汝の恚を知らんや。

12 願くは我儕に己が日を算ふることを敎へて、
智慧の心を得しめ給へ。

13 エホバよ、歸り給へ、何時まで待たせ給ふや、
汝の僕等に係はれる汝の聖意を變へ給へ。

14 願くは朝に汝の矜恤を以て我儕を飽かしめ、
日の終りまで我儕をして歡喜の聲を揚げしめ給へ。

15 汝が我儕を苦しめ給ひし日に循ひて、
又我儕が禍害を見し年に應ひて、

16 我儕の心を樂ましめ給へ。
汝の作爲を汝の僕等に示し、

17 汝の威光をその子孫に顯はし、
我儕の神なるエホバの恩惠を我儕の上に宿らしめ給へ。
我儕の上に我儕の手の作爲を確立し給へ、
願くは我儕の手の作爲を確立し給へ。

略註

神の人モーセの祈禱とし傳へらる、老預言者晩年の心事を吐露して餘す所なきが如し、彼をして此祈禱を唱へしめし境遇は之を申命記の記事に徵すべし、此篇を以て申命記を短縮して詩に歌ひし者と稱ぶも可なり、其用語に於て、其精神に於て、此詩は誤なき申命記の餘韻なり。

(一)「主よ」 神を威嚴ある宇宙萬物の統治者として稱奉りし尊稱也、第十三節に於ける「エホバ」の名稱と相對し看よ○全能の主權者は世々我儕の棲家なりしと云ふ、神の犯すべからざる神聖を唱ふると同時に彼の愛すべく亦親しむべき者なるを道ふ、詩人は玆に神を怖れて彼より遁れんとするに非ず、神の親むべきを知るが故に彼に罪の赦免を乞ふて彼の懷に歸らんと欲するなり、神の神聖を歌ふに最も嚴なる此詩は其發端に於て既に此信賴の語を漏せり、宇宙の主權者は亦契約の神り、彼は世々我儕、彼を畏るゝ者の息ひ且つ隱るべき棲家なりと。

(二)山は地を支ゆる柱なり、其生れざる先きとは地の基礎をも未だ定め給はざりし時なり、「地」は地球にして「土」は沃土なり、嬰兒の未だ母の胎を出ざりし時の如くに山も陸も未だ造主の聖圖の中に存せし時より、然り、其前より、未來永刧に至るまで汝は神なりと、「なりし」にあらず、又「ならん」に非ず、「なり」也、過去もなく、未來もなく、永久に現在する者なり、聖書を學ぶに深く意を動詞の時に留むべし。

(三)「塵に歸らしむ」は塵より出し者を塵に歸らしむるの意なり(創世記三の十九)、「歸來れ」は新たに人を地上に呼起すための命令の詞なり、神は人類の生死を司り給ふ、彼は死を命じ亦生を命じ給ふ、人は逝り亦來るに、神のみは惟り永遠に生きて人類の出現を司り給ふ。

(四)「千年も今や過ぎんとする昨日の如し」時なる觀念を有し給はざる永遠の實在者に取て斯くあるべきは勿論なり、年と云ひ日と云ふは蜉蝣の如き我儕人類に取てのみ意味あるなり、彼れ神に取ては千年も今や昨日となりて過ぎんとする今日の如し、我儕は其一瞬時期なるを知る、千歳の長期も神に在りては我儕の一日の如し○否な、一日よりも更らに短かし、寧ろ我儕が知らずして過す夜間の一時と稱せん、地に在ては國民興り國民亡ぶるも天に在ては春夢結ばれて未だ醒めず、希望の朝曦の尙ほ早きを歎ずるの感あらん、短氣なるは短命なる人間のみ、生ありて死あるを知らざる神は時なきが故に其忍耐は無限なり。

(五)(六)、弱くして傲慢なる人間を見よ、神、若し一朝洪水を起して彼等を覆ひ給へば彼等は睡眠と化して消失す、亦人を何にか譬へん、彼はユダヤの山地を飾る春雨に會ふて忽ち萠出る青草なり、朝には發出て榮え、夕には苅られて枯る、神の永存に較べて、人生のはかなきこと實に言語に絶ゆ。

(七)斯くも蜉蝣の如き我儕は汝の怒に由りて消失す、(八)汝は汝の正義を以て我儕を照らし、我儕をして我儕の罪と汚穢とに堪へざらしめ給ふ、(九)我儕恐怖の中に我儕の生命を終らんとす、我儕は汝の聖顏を拜し得ずして、我儕の年は歡喜の生命なくして唯僅かに氣息の如くにして消失せんとす、(十)汝我儕の何なるを知り給ふや、歳七十に過ぎざる現世の旅客なり、縱し壯健にして八十に達するを得るも、我儕の誇りとする所のものはたゞ勤勞と悲哀とのみ、年月の去り逝くこと速かにして我等は鳥の如くに飛び去る、我儕は汝と强弱を競べ得る汝の同輩にあらざるなり、(十一)誰か汝の怒の力を知る者あらんや、汝にして若し汝の威嚴に相應する恚を發し給はんか、我儕は直に粉碎されんのみ、(十二)ァ、神よ、汝は斯も强くして我儕は斯くも弱き者なれば、願くは我儕に己が日の如何に短かきかを覺らしめ給へ、又我儕心に誇り、神に抗し、更らに其怒を招くことなく、謙遜て其聖旨に服するの智慧の心を得しめ給へ。

(十三)契約の神なるヱホバよ、宇宙の主權者とのみして我儕に顯れ給ふことなく、ヱ

ホバとして、即ち我儕の罪を赦す者として我儕の中に歸り給へ、汝は一度は我儕の中に在せり、然ども我儕の罪の故を以て汝は我儕の中を去り給へり、嗚呼ヱホバよ、歸り給へ、何時まで汝は我儕を俟焦れしめ給ふや、汝は宿命の神に非ず、我儕の懺悔の聲に應じて我儕に係はれる汝の聖意を變へ給ひて我儕を再び汝の恩惠の中に受け給へ、(十四)願くは朝に汝の矜恤を以て我儕の饑えたる心を飽かしめ、我儕が世を終るまで我儕をして歡喜の聲を揚げしめ給へ、(十五)我儕の懲罰の日は長かりき、我儕の鞭撻の年は久しかりき、願くは我儕の受けし苦痛と禍害とに循ひて(其割合に)之を癒すに足るの喜樂を我儕の心に下し給へ、(十六)斯くて汝の恩惠の作爲を我儕に示し、我儕をして之を我儕の子孫に傳へしめ、彼等をも亦永く汝の威光を仰ぐに至らしめ給ひて、汝ヱホバの恩惠の記臆を永く我儕イスラエルの中に留めしめ給へ、(十七)我儕は切に願ふ、我儕の上に我儕が手に取りし汝の聖業を確立し給はんことを、我儕は重ねて願ふ、我儕を救ひ給ひて我儕が汝のためになせし我等の事業を固め給はんことを、汝が我儕に委ね給ひし汝の事業のために汝の矜恤を再び我儕の上に下し給へ。

詩篇の註解者マクラレン氏曰く、「是れ朽つべからざる言辭を以て朽つべき人に就て語りし歌なり」と、神に撻たれて神を恨まず、神の絶大を知て神より離れんとせずして反て之に近かんとす、怨言の如くに見えて然らず、神の憤怒を語るも是れ神の無慈悲を訴へんがために非ずして、人の罪深くして神の神聖を瀆せし事を告げんがため也、此篇の作者は神に在て神を疑へり、彼は神の愛を信じて之に與んがために神に迫りしなり、彼は信神的懷疑者なりき、故に彼は大なる慰藉の中に在て大なる苦痛を訴ふるを得たり、願くは我儕此篇を愛誦する者の常に此心を以て我儕の心となさんことを。

『ヱホバを讃めまつれ』

詩篇第百三篇

1 我が靈魂よ、ヱホバを讃めまつれ、

2 我が裏なる凡のものよ、エホバを讃めまつれ。
我が靈魂よ、エホバを讃めまつれ、
その凡の恩惠を忘る勿れ。

3 彼は汝の凡の不義を赦し給ふ、
彼は汝の凡の疾病を癒し給ふ、

4 彼は汝の生命を滅亡より贖ひ出し給ふ、
彼は仁慈と憐憫とを以て汝の首を飾り給ふ、

5 彼は汝の口を嘉物にて飽かしめ給ふ、
斯くて彼は汝を鷲の如くに汝の壯時に復らしめ給ふ。

6 エホバは凡て虐げらるゝ者のために
公義と審判とを行ひ給ふ。

7 彼はその途をモーゼに知らしめ給へり、

8 その作爲をイスラエルの子輩に知らしめ給へり。
エホバは憐憫と恩惠とにて充ち給ふ、
怒ること遲くして仁慈に富み給ふ、

9 恒に抗爭ひ給はず、
永遠に怒を懷き給はざるなり、

10 我等の罪に循ひて我等を待遇ひ給はず、
我等の不義に循ひて我等に報ひ給はざりき。

11 天の地よりも高きが如く、
彼を畏るゝ者に彼の賜ふ恩惠は大なり。

12 東の西より遠きが如く、
彼は我等の愆を遠け給へり。

13 父が其子を憐憫むが如く、
エホバは己を畏るゝ者を憐憫み給ふ。

14 彼は我等の何たる乎を知り給ふ、
彼は我等の塵なることを忘れ給はず。
15 脆弱き人は……彼の齡は草の如し、
その榮ゆるや野の花の如し、
16 風、其上を經過れば失せて迹なし、
その生出し處も早や已に彼を知らざるなり。
17 然れどエホバの憐憫は永遠より永遠に涉りて彼を畏るゝ者の上に在り
其公義は子々孫々にまで至る。
18 その契約を守り、
その訓諭を心に留めて之を行ふ者の上に在り。
19 エホバは其寶座を諸〻の天の上に置き給へり、
その政權は萬物の上にあり。

20 エホバを讃めまつれ、汝等その天使等よ、
汝等力猛き者よ、その聖言を行ひ、
その聖言の聲に耳を傾くる者よ。
21 エホバを讃めまつれ、天の萬軍よ、
その聖旨を行ふ汝等その僕等よ。
22 エホバを讃めまつれ、その造り給へる萬物よ、
その政權の行涉る凡の所に於て。
嗚呼我が靈魂よ、エホバを讃めまつれ。

略註

徹頭徹尾讃美の歌なり、其中に悲哀と不平とは痕迹だも留めず、詩人の心は感謝を以て充ち溢れ、彼は讃美するを知て、願求し又は愁訴するを知らざる也。

(一)彼は先つ自己の靈魂を督促して曰ふ「エホバを讃めまつれ」と、靈魂は人の感情の在る所なり、詩人の意識は既に充分にエホバの仁慈と憐憫とを識認せり、然れど

も彼は彼の感情的半面の彼の意識に伴ふて充分に之を感ぜざらんことを懼れたり、故に彼は自己の靈魂に向て曰へり「我れ自身よ、ヱホバの恩惠を覺りしのみならず、之を感じて、之に動かされよ」と○「衷なる凡のもの」とは凡ての機能と機關とを指して云ふなり、彼は感恩の念の彼の全身に行渡らんことを欲へり、彼は彼の五臟六腑四肢五官までが悉くヱホバの恩惠を感ずるに至らんことを求めたり○(三—五)神が吾等を救ひ給ふ其順序を示して明かなり、神は先づ吾等の罪(不義)を赦し、其結果として吾等の凡ての疾病(重に靈魂の)を癒し、以て吾等の生命を完うし給ふ、而して吾等の生命の安全なるに及んで神はその仁慈と憐憫とを以て吾等の首を飾り(冕を戴かしむるの意)、吾等に被らしむるに所謂る「聖なる美はしき衣」(詩篇百十篇三節)を以てし、以て神と人との前に歡喜の生涯を送らしめ給ふ、彼は亦美はしき義の衣を以て吾等の身を裝ひ給ふ而已ならず、嘉物を以て吾等の口を飽かしめ給ふ、吾等は飾られ、亦養はる、罪の赦免を以て始まりし神の恩惠は靈魂の裝飾と充實とに及べり、而して此恩惠に與かる者は身に老ひて心に老ひず、寓話に所謂る鷲の羽翼を脱落してその壯時に

復へるが如く彼は永久に其青春の活力を失はず、走れども疲れず、歩めども倦まざるべし(以賽亞書四十章廿八節以下參考)。

以上は詩人が自己の心に於て實驗せし奇しき神の聖業なりとす、然れども神は一人の神に非らずしてまた萬民の神なり、隱れたるにのみ行らき給ふ心靈の神に非ずして亦顯明なる所に働き給ふ歴史の神なり、以下第六節より第十四節に渉りて詩人は神の公義を頌め、其公德を稱へまつれり。

(六)「虐げらるゝ者」は不正の待遇を受くる者なり、罪なきに罰せらるゝ者、愆なきに責めらるゝ者は凡て人に「虐げらるゝ者」なり、其强者なると弱者なるとに係はらず、其大國民なると小國民なるとの別なく、凡て權利を侵害せられ、受くべきの賞を受けず、受くべからざるの罰を受くる者を神は公平に審判き給ふと、公義は神の特性なれば彼は萬民に公義を施し給はざれば休み給はざるべし、水の低きに就くが如く、神は必ず公義を行ひ給ふ、是れ神の特性なり、神の存在する間は公義は行はれずしては止まざるべし、而して人類の歴史は公義實現の途程なり、感謝すべきかな。○(七)出埃

及記第三十三章十三節を見よ。○(八)同第三十四章六、七節を見よ、「エホバ、憐憫あり、恩惠あり、怒ること遲く、恩惠と眞實の大なる神」なり、イスラエルの神は如斯き者なり、人の想ふ所に過ぎ、赦すことを好んで、罰することを憎み給ふ者なり。

(九)「恒に抗爭ひ給はず」抗爭ひ給はざるに非ず、彼の愛子にして彼の道に逆ひ、活ける生命の水を捨て死に就かんとするか、彼は彼の愛のために彼等と抗爭ざるを得ず、然れども抗爭は神の好み給ふ所のものに非ず、彼は恒に愛し給ふ、然れども稀には止むなく抗爭ひ給ふ。○彼は亦怒り給ふ、然れども永遠に怒り給はず、彼は誠實なるが故に怒り給ふなり、然れども仁慈なるが故に速に赦し給ふなり、彼は怒ること遲くして、赦すこと速かなり。○(十)我等を罰し給ふも我等の罪に循ひて罰し給はず、我等を困め給ふも我等の不義に循ひて困め給はず、神の加へ給ふ刑罰は我等が犯せし罪に較べて恒に甚だ輕し。○(十一)我れ神の恩惠を何に譬へんか、天の地よりも高きが如く其高きこと大にして限なし。○(十二)彼は東の西より遠きが如くに、我等の愆を遠け給へり、彼の宥恕の德に依て我等の愆は天涯の遠きにまで取り去られたり、「その不

法を免され、其罪を蔽はるゝ者は福ひなり」(羅馬書四章七節)。○(十三)然れども神の愛は單に高きに止まらず、亦廣きに止まらず、其深き事も亦量るべからず、天の高きが如き愛を以て我等を愛し、地の廣きが如き仁慈を以て我等を惠み給ふエホバは父が其子を憐むの憐憫を以て我等彼を畏るゝ者を憐み給ふ、宇宙の廣大に父の愛を加へし者是れエホバの神なり、我等が彼を頌めまづるも亦宜べならずや。○(十四)宏大無邊の神は我等を待遇ひ給ふに方て我等の何なる乎を忘れ給はず、我等は塵にて造られて復た塵に歸る者なり(創世記二章七節)。○(十五、十六)我等はまた野の花の如き者なり、熱風一たび其上を吹けば消えて其迹を留めず、我等の居住の地すらも速に我等を忘る。○(十七)我等の斯くもはかなきに反して永遠より永遠に渉る者はエホバと其憐憫と公義となり。○(十八)而して彼は之を彼の契約を守り、彼の訓諭を行ふ者の上に下し給ふ、我等何んぞ我等の弱きを歎ずるを須ゐん、「我れ生くれば汝等も生きん」と主は曰ひ給へり(約翰傳十四章十九節)。

(十九)エホバは公義を以て世を審判き給ひて其寶座を諸天の上に置き給へり、「天」は能力の在る所なり、故に寶座を諸天の上に置き給へる者は萬物の上に政權を握る者なり、卽ち「諸〳〵の政」と權威と能力と宰治と」(以弗所書一章二十節)の上に立つ者なり、エホバは凡て虐げらるゝ者のために公義と審判とを行ひ給ふて後に(第六節)此最高の位に卽き給ふ。○(廿—廿二)玆に於てか詩人は更らに天の諸族並に宇宙の萬物より讃美を徵して曰ふ「汝等エホバを讃めまつれ」と、主の道を行ふに力猛き天使等に對つて言ふ「エホバを讃めまつれ」と、エホバの聖旨を行て其途を愆たざる天の萬軍に叫んで曰ふ「エホバを讃めまつれ」と、凡ての造化を喚起して曰ふ「エホバを讃めまつれ」と。

終りに彼は再び自己の靈魂を督促して曰ふ「エホバを讃めまつれ」と。

『神は我儕の堅城』

詩篇第四十六篇

此詩何人の作なるや知る能はず、或ひはエルサレム城外よりアッシリア軍の退陣の後豫言者イザヤの指導に依て作られしものならんと云ふ者あり、或ひは然らん(列王記略下十八、十九章參考)、然れども其の何人の作たるに係はらず、神を信ずる者の堅城鐵壁の何たる耶を歌ひし者として聖詩中特に人目を惹くものなり、有名なるルーテルの讃美歌にして『宗教革命時代の軍歌』と稱へるゝ Eine feste Burg ist unser Gott (堅き城は我等の神なり)は此詩を義譯せしものなり、其の中に勇氣凛々として動かすべからざるものあれば、又碧潭の淸水の獨り靜かに感謝して掬すべきものあり、過去三千年の長き間、神を信ずる者の恐怖を靜め、敵軍蝗の如くに起て彼を圍みし時に彼に神の扶助を俟望せしめし此聖詩を、吾等今日の日本人も亦深く味はずして止む可けんや。

篇中「神の都」は往時の聖都エルサレム、今の『神の敎會』なり、是を濕す河は盡き

ざる聖靈の流れなり。

1 神は我儕の堅城また力なり、
艱難める時のいと近き扶助なり、
2 然れば我儕は懼れじ、縱令地は變り、
山は海の中央に移さるとも、
3 縱し其水は鳴轟きて騷ぎ、
其溢るゝがために山は動ぐとも。
萬軍のエホバは我儕と偕なり、
ヤコブの神は我儕の城なり。
4 河あり、其支流は神の都を歡ばしむ、
至上者の住み給ふ聖所を喜ばしむ、

5 神、其中に在し給ふが故に都は動かじ、
神は彼所を扶け給はん、速に彼所を扶け給はん。
6 諸〻の民は騷ぎたり、諸の國は搖ぎたり、
彼は一聲を放ち給へり、而して地は消えんとせり。
7 萬軍のエホバは我儕と偕なり、
ヤコブの神は我儕の城なり。
8 來りてエホバの作爲を觀よ、
地に爲せる其掃攘の迹を看よ、
9 エホバは地の極までも戰鬪を止めしめ、
弓を折り、戈を斷ち、戰車を火にて燒き給ふ。
10 「汝等靜まりて我の神たるを識れ、
我は萬民に崇められ全地に尊まるべしと。

萬軍のエホバは我儕と偕なり
ヤコブの神は我儕の城なり。

猶太人の愛國歌

詩篇第百三十七篇

1 我等バビロンの河の濱に座ばりシオンを憶ひ出て涙を流しぬ、
2 我等その邊の柳に我が琴を懸けたり、
3 そは我等を虜にせしもの我等に歌を索めたり、我等を掠めし者我等に已れを歡ばせんとてシオンの歌一つ謳へといへり、
4 我等外邦にありていかでエホバの歌を謳はんや。
5 エルサレムよ、もし我れ汝を忘れなば、我が右の手にその巧を忘れしめよ、
6 もし我れ汝を憶ひ出ず、もし我れエルサレムを我が總ての歡喜の極となさずば、我が舌を我が顎に貼かしめよ。
7 エホバよ、願くはエルサレムの日にエドムの子輩が「これを掃ひ除け、その基礎までも排ひ除け」といへるを聖意に留め給へ、
8 滅きるべきバビロンの女よ、汝が我等に作し如く汝に報ゆる者は福なるべし、
9 汝の嬰兒を取りて岩の上に投げ打つ者は福なるべし。

其何人の作なる乎を知る能はず、或は預言者エレミヤの作なりと曰ふものあれども彼が曾て彼の國人と共にバビロンに下りしことあるや疑はし、其句調の餘りに感情的なるより推して之を法律的なりし預言者エゼキエルの作と見るは難し、吾人は此篇の、チブカドネザル大王に擒はれてバビロンに下りし數萬人の猶太人中の一人の作なるを知るのみ、其他を知らず、蓋し彼の如き愛國者は彼一人に止まらざりしならん。

我等バビロンの河の濱に坐はり、

紀元前五百八十六年耶路撒冷城チブカドネザル王の陷る所となり、其民は捕はれてバビロン附近の地に遷されたり、彼等彼地に止ること五十餘年、故國の山河を望みて歎まず、バビロン國にユーフラチス、チグリスの兩大河あり、國中亦到る處に運河を通

ず、「バビロンの河」とは蓋し是等を指して云へるなるべし、ユダは山國なるにバビロンの地は平原國なり、山國の民擒はれて一峯の視線を遮るものなき平々坦々たるバビロンに遷さる、誰か故國を憶はざらんや、月は山端に昇らずして、草より出て草に入る、水は溪間を走らずして、芒茅蘆葦の間を流る、翠巒の間に養はれし民は草原の無趣味に堪ゆる能はず、ために此悲聲を發す。

シオンを憶ひ出て涙を流しぬ、

シオンはシオン山なり、エルサレム城市の建てられし處なり、水邊に在て山上の故國を憶ふ、此處に壓制あり、偶像崇拜あり、空氣は重くして水濁る、彼處に自由ありたり、眞神の禮拜ありたり、空氣は晴朗にして水清し、我が今日の悲況を顧みて曩日の快を憶ひ出さゞるを得ずと。

我等其邊の柳に我が琴を懸けぬ、

憂極つて樂輟む、今や琴瑟の要我にあるなし、雅歌我の心に絶えて我は我が琴を取て河邊の柳に懸けぬ、楊柳は我の悲哀を代表する者、河流に臨て獨り憂愁に沈む、昔時はレバノン山の香柏と共に山頂に自由の空氣を呼吸せし者、今はエホバの憤怒に觸れてバビロンの河邊に楊柳を伴とす、水は滔々たり綠楊の津、涙は滴々たり捕虜の情。

そは我等を虜にせし者我等に歌を索めたり、

無情なる我等の征服者よ、彼等は我等の自由を奪ひ我等を故國より逐ひながら我等より歌を索めたり、彼等は未だ歌の何たる乎を知らず、歌は心情の發動なり、歡喜の溢れて音調となりしものなり、奴隷の民に詩歌あるなし、彼等の稱して歌となすものは我等の稱する歌にあらず、歌は遊戯にあらず、技術にあらず、我等を虜にして我等に歌を索む、奚ぞユフラテ河邊に生ずる夾竹桃の根を絶て之に濃紅色の花輪を索めざる汝等の無情と無識とは亦甚だしからずやと。

我等を掠めし者我等に己れを歎ばせんとて云々、

其意に於て前句と異なる所なし、バビロン人はユダ人を悲慘の境遇に沈め置きながら己れを歎ばせんとて彼等に歌を索めたり、是れ殘虐の最も甚だしき者なり、世の放蕩者と雖も淫樂を索めんが爲には多くの纒頭を散して惜まず、然るに玆にバビロン人は其掠奪を恣にせし民より聖歌を要求せり、何ぞ思はざるの甚だしきや、何ぞ察せざるの甚だしきや、然れども粗野無情、バビロン人の如きは今の世にも亦乏しからず、利慾は彼等の良心を鈍らし、武勳は彼等の詩心を滅せり、彼等は詩人の心を知らず、故に詩歌は何時にても彼等の要求に應じて出で來るべきものなりと信ず、彼等と詩歌の事を談ずるは猫犬の類と寶石の價値を議するに等し、詩人は俗了せる政治家軍人の支配の下に榮えず、純潔なる處女が惡漢の前を厭ふが如く詩人は俗人の前を忌む、「シオンの歌」聖歌なり、眞神の恩惠を讃ふる歌なり、之を俗人の前に歌へと迫まらる、是れ强壓の最も甚しきものならずや。

我等外邦にありていかでエホバの歌を謳はんや、

我等の歌は愛國の歌なり、愛國の歌は愛神の譜なり、我等に國を離れて神あるなし、神を離れて讃美あるなし、國と神と希望、シオンとエホバと讃美歌、我等を外國に連れ來りて我等にエホバの歌を謳へと迫る、是れ豆を煮るに豆の箕を燃くの類ならずや。問ふを休めよ、神は宇宙的なるが故に宇宙到る所に讃歌あらんと、神は宇宙的なるも我は國家的なり、我身、我肉、我が靈は我が國を離れて存在するものに非ず、神はユダヤ人として我を造り給へり、故にユダヤ國を離れて我は我にあらず、ユダヤ國を逐はれて我は廢人の如き者なり、新郎、新婦を失ふて雅歌を揚げ得んや、我れ我がシオンを逐はれてエホバの歌を謳ひ得んや。

エルサレムよ、もし我れ汝を忘れなば我が右の手にその巧を忘れしめよ、

エルサレムよ、我れ若し汝を忘れなば我が右の手をして其巧を忘れしめ、之をして琴絃に觸るゝこと能はざらしめ、清音一聲をだも揚げ得ざらしめよ、我が音樂は總て我

が國のためなり、エルサレムを忘れし我に雅韻なし、我れ若し故山を忘れんには我は我が彈琴の技を廢てんものをと。

外邦に在りて異邦人を歡ばせんために彼等の前にエホバの歌を謳ふは是れ神と國とを敵人の手に賣す事なり、是れ故國を忘るゝにあらざれば爲す能はざる所なり、國を忘れて國歌を奏せよと要求さる、詩人之に慨して彼の悲憤を故山に對て訴ふ。

もし我れ汝を憶ひ出ずは……我が舌を我が顎に貼かしめよ、

我が舌をして動き得ざらしめよ、我をして啞者たらしめよ、清音の我が口より洩るゝことなからしめよ、我の歌は我が國を頌めんためなり、我が聲はエルサレムを讃めんためなり、我れ我が國に就て誇る所なきに至りて我の舌は不用となるなり。

エルサレムを我が總ての歡喜の極となさずば、

利得の歡喜あり、名譽の歡喜あり、愛慕の歡喜あり、讀書の歡喜あり、勤學の歡喜あり、音樂の歡喜あり、然れども何者か愛國の歡喜に及ぶ者あらんや、友の慕はしきも國の慕はしきに若かず、世の總ての善きものを合するも故山一瞥の快に若かず、我が歡喜の極は我が國なり、我が妻に優りて愛らしき者、我が身、我が靈、我が全生を献ぐるも尚ほ足らざる者は我が國なり、我にして若しエルサレムを我が愛慕の第一位に置くを得ずば我は寧ろ啞者となりて永久の緘默を守らんものをと。

エルサレムの日にエドムの子輩が云々、

「エルサレムの日」とはエルサレム全盛の時を指して云ふ、卽ち其再びユダヤ人の手に回復されてメシヤ(受膏者)が來て其王となり、萬邦其光輝に浴するの時をいふ、エドムはユダヤの南方に在りし國なり、其民はユダ人の祖先なりしヤコブの兄弟エサウの子孫にして人種的關係より云へば二者骨肉の間柄なり、然るにユダ人の其國を逐はるゝや、彼等に對て無限の同情を表すべき此等エドムの子輩は反て其不幸を見て喜び、エルサレム城市の陷落を見て尚ほ飽き足らずして、これを掃ひ除けその基礎までも排

ひ除けよと叫びたり、世に憤慨すべき事多しと雖も艱難に遭遇するの際、兄弟骨肉の嘲罵する所となるに優るの憤慨あるなし、バビロン人の殘虐は忍ぶを得ん、然れどもエドムの子輩の嘲弄は忍ぶ可らず、詩人の愛國的心情は逆て隣邦エドムに及びぬ、其呪詛の辭なるが故に詩人の狹量を責むる者あり、然れども詩は眞情有の儘を貴しとす怒る時に怒を抑ふるは詩にあらず、たゞ野卑なる私情的憤怒にあらざれば可なり。

滅さるべきバビロンの女よ、

城市を指して女と稱ふはユダ人の用語法なり、其時尚ほ文明世界の財權政權兩つながらを握りし彼女を指して、滅ぼさるべきバビロンといふ、恰も今日のロンドンに在て之を「滅ぼさるべきロンドン」と呼ぶに異ならず、詩人の大膽と確信とに信服すべきものあり。

汝が我に作し如く汝に報ゆる人は福ひなり、

是れ目にて目を償ひ齒にて齒を償ふの語調なり、基督教的倫理としては受取り難し、而かも敵愾心の盛なる今日、何人も詩人を責むるに非倫を以てする者はなけむ、イエスキリストの教化を受けざりし舊約時代の豫言者に此呪詛報仇の言ありしを見て以て愛敵の精神の如何に高貴なるものなる乎を知るべし。

汝の嬰兒を取りて岩の上に投げ擲つ者は福ひなり、

是れ實に殘忍なる祈願なり、嬰兒何の罪かある、之を岩上に打付け、其頭腦を碎き得たればとて吾人の心に何の快かある、之を願ふは病的愛國心なり、吾人は此事の聖書に記載しあればとて神の教示として之を受けず、否な、反て詩人の理想のなほ低きを憫む、吾人は彼に倣ふことなく、「十二萬の左右を辨へざる大なる府ニテベを我れ惜まざらんや」と宣べ給ひて豫言者ヨナの祈願を斥け給ひてニテベの市を救ひ給ひし恩惠の神の命に從はんと欲す。

然れども信仰は信仰にして詩は詩なり、理は理にして情は情なり、情をして理を曲げ

しむべからず、然れども理をして時には情を恕する所あらしめよ、掠奪を被ること前後二回、最愛の城市は毀たれ、全國擧て外邦に捕虜となることこゝに五十年、父は絶望の裡に失せ母は悲痛の間に眠れり、嬰兒の目前に屠られしもの其の數を知らず、報仇の念は惡念ならん、然れども此念の時に詩人の胸中に湧き來りしは事實なり、彼は故なくしては怒らざりしなり、彼は害を加へられずして加害を願はざりしなり、我に罪を犯す者を七次を七十倍するまで赦すべしとはキリストの敎訓なり、而して吾等は謹んで此敎訓に從て歩まんと欲す、たゞ神よ、吾等の荏弱を赦し給へ、吾等時には敵人の窮迫する所となり、我れ溫顏を以て彼に對するも彼は我が面に唾して快哉を叫べり、我れ彼に就て善を意へば彼は我に就て盡く惡を念ぜり、彼は我の死滅を計畫し、我の墜落を聞いて喜べり、故に我も窮迫の餘り、時には報仇の念を懷けり、然れども神よ、是れ我が本心にあらざるなり、我は汝の恩惠に由て彼等我の讎敵をも愛せんと欲す、汝願くは我が心に汝の限りなき愛心を注ぎ、我をして我を賣りし友、我が爲めに總ての恥辱を圖りし者を我が心の奥底より愛することを得しめ給へ。

永遠の慈愛

詩篇第百三十六篇

1 感謝をエホバに奉れ、彼は恩惠深し、
其慈愛は永遠に絶ることなし、

2 感謝を神の神に奉れ、
其慈愛は永遠に絶ることなし、

3 感謝を主の主に奉れ、
其慈愛は永遠に絶ることなし。

4 彼は惟り大なる業を爲し給ふ、
其慈愛は永遠に絶ることなし、

5 智慧を以て天を造り給へり、
其慈愛は永遠に絶ることなし、
6 地を水の上に布き給へり、
其慈愛は永遠に絶ることなし、
7 巨大なる光を造り給へり、
其慈愛は永遠に絶ることなし、
8 晝を司るために日を造り給へり、
其慈愛は永遠に絶ることなし、
9 夜を司るために月と星とを造り給へり
其慈愛は永遠に絶ることなし。
10 エジプト人の初子を以て彼等を擊ち給へり、
其慈愛は永遠に絶ることなし、

11 彼等の中よりイスラエルを率ゐ出し給へり、
其慈愛は永遠に絶ることなし。
12 臂を延し大なる强き手を以て、……
其慈愛は永遠に絶ることなし。
13 紅海を截斷り給へり、
其慈愛は永遠に絶ることなし。
14 イスラエルをして其中を通過らしめ給へり
其慈愛は永遠に絶ることなし。
15 パロと其軍勢とを紅海の中に篩ひ給へり
其慈愛は永遠に絶ることなし。
16 荒野の中に其民を導き給へり、
其慈愛は永遠に絶ることなし。
17 大なる王等を擊ち給へり、

其慈愛は永遠に絶ることなし。
18 又強き王等を滅し給へり、
其慈愛は永遠に絶ることなし。

* * * * *

23 我等が微賤かりし時に我等を記憶し給へり、
其慈愛は永遠に絶ることなし。
24 我等の敵より我等を救出し給へり、
其慈愛は永遠に絶ることなし。

* * * * *

26 感謝を天の神に奉れよ、
其慈愛は永遠に絶ることなし。

略註

(一)神の性は愛なり、彼は素より恩惠深し、故に神は神として感謝を奉るべき者なり、彼の恩惠の表現を須つを要せず、愛なる神は彼れ自身として讃めまつるべき者なり。

(二)神の上に立つ神、諸神の中に在て惟り神の尊稱を受くるに足る者、其慈愛は永遠に絶ることなし、全能にして全智、同時に又全慈にして全悲、其慈愛に於て絶對無限なる者、ヱホバの神は如斯き者なり、而して慈愛に於て超越し給ふが故に彼はすべての神に優りて尊し。

(三)神の神にして主の主、絶對的至上者、而かも其慈愛は永遠に絶ることなし、諸神諸王の上に立ち宇宙の全權を握り給ふ彼の、其慈愛は永遠に絶ることなし、強き丈け優さしく、智き丈け恩惠深し、無限の權能と無限の正義と、之に伴ふ、然り之に勝る無限の慈愛とを懷き給ふ者、神はまことに如斯き者なり、彼が神たるはまことに是れが故なり。

(四)彼れのみ惟り大なる奇跡を行ひ給ふ、彼は宇宙と其中に在る萬物を造り給へり、而して彼は斯くも能力ある者なりと雖も、然かも其慈愛は永遠に絶るこなし、彼は畏

るべき者なるよりは寧ろ愛すべき者なり、宇宙を造り給ひし彼は其心に父の愛を藏し給ふ。

(五)智慧を以て天を造り給へり、理に合ひて天體を排置し、法に循ひて之を回轉し給へり、參宿を造り給へり、昴宿を造り給へり、アークツラスを造り給へり、大熊星小熊星を造り給へり、一等星より九等星に至るまで六十三萬餘の星と其他未だ人の眼に觸れざる無數の星とを造り給へり、誠に

諸の天は神の榮光を顯はし、
穹蒼は其手の工を示す、
然り、更らに深く之を解すれば、
諸の天は神の慈愛を顯はし、
穹蒼は其心の愛を示す、
其慈愛は永遠に絶る事なし、愛は智識の前に在り、又其後に在り故に彼は曰ひ給へり
汝等目を揚げて天を觀よ、……天は烟の如く消えん……然れど我救は永遠に存ふる

なり

と(以賽亞書五十一章六節)。

(六)天を造り給へり、又地を造り給へり、青々たる地を水の上に布き給ひて人の住處として美はしき所たらしめ給へり、誠に彼の慈愛は永遠に絶ることなし、此山と海とを造り、此野と丘とを造り給ひし者、彼れ爭か終に我等を捨て給はんや、諸の天は神の慈愛を顯はし、地の萬物は其心の愛を示す、下よりの聲は上よりの聲に和して曰ふ、神は愛なりと。

(七)更らに天に就て語らん乎、彼は巨大なる光を造り給へり、日と月とを造り給へり、彼は愛なるが故に之を造り給へり、其慈愛は日と共に照り月と共に輝きて永遠に絶ゆることなし。

(八)日を造り給へり—彼は愛なり。

(九)月と星とを造り給へり—彼は愛なり、日を仰ぎ月を眺めて、彼の慈愛の永遠に絶ることなきを知るなり。

神は愛なり(一—三節)、其の愛は宇宙萬物に於て顯はる(四—九節)、又歴史に於て顯はる(十—十八節)。

(十)エジプト人の頑强を挫かんがために、彼等の最愛の初子をすら擊ち給へり。

(十一)エジプト人の中よりイスラエルを率ゐ出し給へり。

(十二)其民を救はんがためには幾回か非常手段を取り給へり。

(十三)布を截つが如くに紅海を截斷り給へり。

(十四)イスラエルをして其中を通過らしめ給へり。

(十五)其後を追ふパロと其軍勢とを風の吹き去る粃糠の如くに之を海中に篩ひ落し給へり。

(十六)四十年の間其民をアカバの荒野の中に導き給へり。

(十七)彼等の前路を遮らんとする大なる王等を擊ち給へり。

(十八)又强き王等を滅し給へり。

是等の事を想ふてエホバの恩惠を意はざらんと欲するも得ず、選民の歴史は歩一歩悉く恩惠の指導に由れり、永遠に絶ることなき慈愛のみ能く彼等を聖めて神の民となせり。

(廿三)「我等が微賤かりし時に云々」、是れ或は詩人がイスラエルを代表して曰ひし言ならん、然れども亦詩人自身の實驗を語りし言として之を解するを得べし、エホバに導かるゝ者は其國家なると個人なるとを問はず、其生涯の實驗に於て異なる所なし、此言蓋し主として詩人自身の實驗を語りし者として解する方、適當なるべし。

(廿四)「我等の敵より我等を救出し給へり」、神に愛せらるゝ者に敵多し、エジプト人あり、アマレク人あり、アモリ人の王シホンあり、バシヤンの王オグありて、或は我等の後を逐ひ、或は我等の途を遮る、然れどもエホバは彼等のすべてより我等を救出し給へり。

(廿六)然れば感謝を天に在す神に奉れよ、エホバは始めに愛にして終りに愛なり、其目的は愛にして其手段は愛なり、彼に就て思ふて愛に就て想はざるを得ず、其慈愛は永遠に絶ることなし。

第十九節より第二十二節まで、幷に第二十五節は一般に後世の追加として認めらる、之を削除して全篇の意を害はざるのみならず、反て其更らに一層明瞭となるを覺ゆ、全篇すべて二十一節、始めの三節は神の性の愛なるを歌ひ、次ぎの六節は造化に顯はれたる彼の愛を讃へ、其次ぎの九節は歷史に顯はれたる彼の愛を唱へ、終りの三節は蓋し作者の實驗に顯はれたる神の愛を述べたる者なるべし、全篇を大別すれば左の如し、

神は愛なり（一—三節）

造化は神の愛なるを示す（四—九節）

歷史は神の愛なるを示す（十—十八節）

我が實驗は神の愛なるを示す（二三、二四、二六節）

神は愛なり、彼の慈愛は永遠に絶ることなし、天と地と、其中に在るすべての物は此事を示す、歷史の出來事はすべて此事を示す、我等の實驗も亦すべて此事を示す、愛の神と、愛に由て成りし宇宙と、愛の指導の記錄なる歷史と、愛の實驗なる我生涯と、

四者相共に證明して曰ふ

其慈愛は永遠に絶ることなし、と。

毒舌絶滅の祈禱

詩篇第十二篇

1 助け給へエホバよ、仁慈は絶え、
誠實は人の中より失せたり、
2 人は各自虛僞を以て其隣人と相語り、
滑かなる唇と貳心を以て言ふ。
3 エホバのすべて滑かなる唇と
大言を吐く舌とを滅し給はんことを、
4 彼等は曰ふ、我等は舌を以て勝たん

唇は我有なり、誰か我等に主たらんやと。

5 苦しむ者掠められ貧しき者歎くが故に
我れ今起たんとエホバ言ひ給ふ、
我は其慕ひ喘ぐ平康に彼を置かんと。

6 エホバの言は雜なき言なり、
爐にて鍊られたる白銀なり、
七度清められたる白銀なり。

7 エホバよ汝は彼等を護り給はん、
汝は彼等を永へに此類より免れしめ給はん。

8 人の子の中に汚穢の崇められるゝ時に、
惡人は此所や彼所に歩むなり。

略註

(一)社會は腐敗を極め、仁慈と誠實とは其跡を絶ちたり、詩人は堪えられずなりて神に向ひて叫びて言へり「助け給へ」と。

(二)人の心に誠實絶えて彼等は各自、空虛の人となれり、彼等は語るべき誠實を有せず、故に虛を以て相語るなり、虛僞を以てするは勿論なり、すべての事悉く虛なり、虛禮なり、無意味なり、語るにあらず、飾るなり、言あり曰く「言語は眞實を覆ふための技術なり」と、人心の腐敗其極に達して其言語は單に裝飾の術たるに至る。

「滑かなる唇と貳心」阿諛と曖昧、眞實は如何なる場合に於ても語るべからずと做す、實に堪え難きは斯かる社會の狀態なり、然かも人はこれを避けんとせず、交際を求むると稱して却て身を其中に投ずるなり、誠に預言者エレミヤの言ひしが如し、

汝等は各自其隣人を欺き、且つ誠實をいはず、其舌に謊を語ることを敎へ、惡を爲すに疲る(耶利米亞記九章五節)。

(三)社會は紊れて斯の如し、故に詩人は祈願を述べて曰ふ「エホバの阿諛の唇と高言の舌とを絶ち給はんことを」と、阿る者は誇るなり、阿諛の唇は同時に又高言の舌な

り、同じく空虛なる心より發す、誠實の語るべきなし、故に鉞の如くに響き、大風の如くに鳴るなり、祈求ふエホバの是等兩つながらを絶ち給はんことを、と。

(四)卑劣なる彼等は曰ふ「我等は舌を以て勝たん」と、彼等は正々堂々義を唱へ、理に訴へて勝たんとせず、誹譏、讒謗、毒舌を弄して人を斃さんと計る、彼等に武士の勇氣なし、君子の公明なし、彼等にたゞ蛇の舌あるのみ、或ひは敎會に隱れ、或ひは文壇に潛み、匿名を以て批評の矢を放ちて公人を傷くるを以て樂となす、彼等は曰ふ「唇(或は筆)は我有なり、誰か我に主たらんや」と、卑怯なる彼等は責任を以て語るの勇氣を有せず、唯言語は彼等の有なりと稱し、之を束縛する者なしと唱へて、氣儘勝手に之を弄するなり、然り人の作りし法律は緩慢にして、言語の責任を問ふに足らず、然れども「すべて人の言ふ所の虛しき言は審判の日に之を訴へざるを得ず」とキリスト曰ひ給へり(馬太傳十二章三十六節)、言語はまことに人の有にあらず、神はまことに之を主り給ふ、而して人の虛言を吐く者あれば彼は此をも彼をも滅し給ふ(哥林多前書六章十三節)。

(五)詩人は虛僞の社會に堪えずなりて、阿諛と高言との絶たれんことを祈りしに、神は之に應へて曰ひ給へり○「苦しむ者掠められ」とは暴主の壓制に遭ふて其所有を掠めらるとの意に非ず、又は稅吏の誅求に遇ふて其收入を掠められるゝの意にあらず、佞人の毒舌に由て其平和と名譽と、時には其地位とを奪はるゝの意なり、誹謗は最惡の壓制なり、之を訴ふるの有司あるなく、之を裁くの法律あるなし、佞人の毒舌にかゝりて其災害は强盜の毒刄にかゝるよりも甚だし○「貧しき者歎くが故に」普通の意味に於ての貧者に非ず、「貧しき者は福なり」とキリストが言ひ給ひし其意味に於ての貧者なり、惡に遭ふて惡に抗せざる者なり、暴人の蹂躪に己が身を委ぬる者なり、誹謗讒謗に其名を傷けられながら敢て辯明を試みざる者なり、謂ふ所の心の貧しき者にして、暴を以て暴に報ひんとする復讐の念を懷かざる者なり○「歎く」は歎願の意なり、人に訴ふるも聽かれざるが故に神に向て歎き叫ぶなり、而して神を動かすの力にして貧者の歎願の如きはなし、世の法律に訴ふるも益なき時に、神の聖座に訴へて効あり、而して佞人跋扈の時に際して、我等に此最後の手段有り、感謝すべきにあらずや。

「我れ今起たんとエホバ言ひ給ふ」大なる「我」と强き「今」、萬軍のエホバ、沈默を守りて今に至り給ひしと雖も、無辜の叫號の聲に應じて今起ち給はんとなり、昔はイスラエルの子孫エジプトに在りて其課せられし勞役の故によりて歎き號ぶの聲神に達しければ、神その長呻を聞き、イスラエルの子孫を眷み給へりとあり（出埃及記二章廿二節以下）、而して今や之と等しく、眞實に神を愛する者の、或ひは文明を誇る社會に在りて、或は神聖を衒ふ教會の中に在りて、佞才の讒誣に遭ふて歎き號ぶの聲神に達しければ、神は又彼を救はんとて今起ち給はんとなり、エホバは實に滑かなる唇と謊を語る舌とを斫り棄て給ふべし、讒佞の除かるゝ時は必ず到る、彼の舌は彼の有にして彼の有にあらず、舌も亦エホバの有なり、彼は永久に其の大言放語するを許し給はざるなり。

鹿の溪水を慕ひ喘くが如く、我が靈魂は汝を慕ふなりと詩人は曰へり（第四十二篇一節）、信者の慕ひ喘ぐ者は平和なり、佞辯の行はれざる所、平和の充ち溢るゝ所なり、然るに禍ひなる哉、彼は今メセクに宿り、ケダルの傍に住めり（第百二十篇五節）、毒舌

の中に宿り、佞口の傍に住めり、其時彼はまことに鹿の溪水を慕ひ喘くが如くに聖者の平康を慕ふなり、而して神は彼の歎願に聞きて、彼を其慕ひ喘ぐ平康に置き給はんとなり、大なる哉此恩惠！而かも期到りて神は必ず此恩惠を我等に施し給ふ、曾ては邪智佞辯の渦中に漂流して據るに家なく、立つに所なかりし者も今は「淫婦バビロン」の手を離れて、眞愛自由の平康に在り、神が時には我等を讒害、毀謗、譏詐、詭譎の中に置き給ふは我等をして永へに平和の水濱に憩はせ給はんが爲めなり、佞人も亦用なくして世に遺さるゝ者に非ず、彼が社會を紊し友團を亂るは彼に由りて平康の一層慕はしくならんが爲なり。

（六）エホバは詩人の祈願を聞き給へり、彼は佞口讒舌を絶たんと告げ給へり、茲に於てか詩人は絶えなんとせし彼の希望を復興し、エホバの誠實を讃へて言へり、曰く「エホバの言は純精の言なり、爐にて鍊られたる白銀の如し、七次煉られたる白銀の如し」と、人の言の虛僞の言にして汚穢の如く泥土の如くなるに較べて云ふ、實に人の聲に慣れて時に神の言を耳にして我等に此感なくんばあらず、唯に其稱讃阿諛の言に

止まらず、其哲學の言も、科學の言も、悉く是れ汚穢、泥土たるの感なくんばあらず、而して人の言に較べて神の言のみ惟り純金の言なるを覺ゆ、然り、然り、否な、否なと、形容を要せず、修飾を要せず、直に心靈の奥底に達す、恩惠に富み、光明に富み、正義溢る、實に人は各自虚を以て其隣人と相語りつゝある間に、神いみは惟り實を以て我等と語り給ふ、此虚僞空言の世に在りて神の言のみ惟り眞實の言なり、故に言ふ「汝の言は眞理なり」と(約翰傳十七章十七節)、信仰の耳を傾けて時にエホバの言に接して此確信の益々強くせらるゝを覺ゆ。

(七)エホバの言は欺かず、彼は必ず彼等を護り給ふ、彼に號び求むる者の聲を聞き給ひて謗る者陷る者の舌より彼等を護り給ふ、エホバは又彼等全體を護り給ふに止まらず、更らに彼等各自卽ち「彼」を助け給ふ、エホバに顧び求むる者は之を瞳の如くに護りて其翼の蔭に匿し給ふ(第十七篇八節)、而して彼を助けて永へに此卑劣の徒より免かれしめ給ふ、蛇の毒舌は其威を逞しうするも、そは永久に神の僕を害ふ能はざるなり。

(八)神の僕は安全なり、然れども讒誣の徒の此世より絶ゆる時はあらざるべし、人の子の中に汚穢の徒の崇めらるゝ時に惡人は到る所に跋扈するなり、彼等が政治家として尊まれ、牧師神學者として崇めらるゝ時に、佞人は政界に跋扈し、奸物は教會に横行するなり、是れ悲しむべき事實なり、然れども止むを得ざるなり、今は末の世なり、麥と稗子とが同時に同所に生ゆる季なり、神に在りては稗子を拔集めて之を燃棄るは容易なり、然れども收穫の季まで彼は此事を爲し給はざるべし、而して其時に至らば

彼れ其使等を遣はして其國の中よりすべて躓礙となる者、又惡を行す人を歛めて、之を爐の火に投入るべし、其處にて哀哭切齒することあるべし、此時義人は父の國に於て日の如く輝かん

とあり(馬太傳十三章四十一節以下)、義人は今は神の守護を以て足れりとすべし、惡人の絶滅は之を來世に於て期せざるべからず。

然らば荒べよ高ぶる舌よ、汝の毒箭を放てよ、

彼れその翮をもて汝を庇ひ給はん、
汝、その翼の下に隱れん、
其眞實は盾なり又干なり、
夜は驚かさるゝことあり、
晝は飛來る矢あり、
……
千人は汝の左に仆れ、
萬人は汝の右に斃る、
然れどその災害は汝に近づく事なからん
とエホバ言ひ給へり(第九十一篇四節以下)、讒者と佞人とは劍の如く己が舌を磨ぎ、
其弓を張りて矢を放つが如くに毒言を放つと雖も、我等はエホバに在りて安し、我等
は彼に依りて勝たん(第六十四篇三節以下)。

約說

佞人跋扈して詩人神に救助を求む=第一、二節。
彼等の世より絶たれんことを祈る=第三、四節。
祈禱の聲に應じて神の言臨る=第五節。
神の言に接して讃美の聲揚る=第六節。
更らに進んで援助到來の確信生ず=第七節。
惡人は依然として横行すべし、然かも義人は彼等の中に在りて安全なり=第八節。

再說

叫號の聲=第一、二節
祈禱の聲=第三、四節
感應の聲=第五節
讃美の聲=第六節

確信の聲＝第七節
覺悟の聲＝第八節

幸福なる家庭

詩篇第百二十八篇

1 福ひなる哉エホバを畏れ、
其道を歩む者は。

2 汝は必ず汝の手の作業の果を食ふべし
汝は幸福なるべし、汝は平康かるべし、

3 汝の妻は家の奥に居りて
實る葡萄樹の如くなるべし、
汝の子等は汝の食卓を圍みて、
若き橄欖樹の如くなるべし。

4 視よ、エホバを畏るゝ者は
斯の如くにして惠まるべし。

略註

(一)エホバを畏るゝは智識の本なり、同時に又家庭幸福の基なり、富あり、位あるも、信仰なく德なくして幸福なる家庭を見る能はざるなり。

(二)斯かる者の勞働は必ず報ひらるべし、或ひは必しも物を以てしては報ひられざるべし、然れども幸福と平康とは必ず之に伴ふて彼に到るべし、彼は必ず彼の手の働に由て生活べし、彼は獨立の人なるべし、故に幸福にして平和の人なるべし。

(三)彼の妻は交際場裡に花を咲すが如き虛僞虛榮の婦人にあらざるべし、彼女は家の奥に居りて一家の實利を計る勤勉誠實の天使なるべし、實る葡萄樹の如くなるべし、

咲きて實らざる櫻の如くにあらず、見て美はしく、實りて貴く、味ふて甘き葡萄樹の如くなるべし。

夫の勞は外に榮え、妻の業は中に實りて、彼等の間に設けられたる子等に不足あることなし、一家の食卓は其の幸福の中心となるべし、而して子等は之を圍みて若かゝ橄欖樹の如くに强健にして旺盛に生育すべし。

(四)注意せよ、エホバを畏るゝものは斯の如くに惠まるべし、卽ち人生最善の賜物なる幸福なる家庭を以て惠まるべし。

ルーテルは此篇を稱して Epithalamium 卽ち結婚の歌と云へり、實に最も聖き意味に於ての結婚の歌なり、世に之にまさりて美はしき家庭歌あるなし。

豐稔の歌

詩篇第六十五篇

第九節

汝は地を見舞ひて之に灌漑き給ふ、
汝は大に之を富まし給ふ、
神の川は水にて滿つ、
汝、斯く地を備へて彼等に穀物を與へ給ふ。

神は、地を造りて、之を謂ゆる天然の法則に放任し給はず、歲毎に之を見舞ひて之に灌漑ぎ之を富まし給ふ、豐熟は直接に神の賚賜なり、金波の田園に揚るは神が耕耘に携はり給ひしが故なり○「神の川」は天より降る雨なり、人の穿し溝の如くに水に缺乏することなし、驟雨沛然として降り、乾枯爲めに蘇生す、神は斯くの如くにして地を備へ給ひて、人と畜とに食物を與へ給ふ。

第十節

汝、豐かに畎を潤し、畝を平らかにし、
汝、白雨を以て之を軟かにし其萠芽を祝し給ふ。

單に雨を降して全地を潤し給ふに止まらず、自から田畝に臨み給ひて其耕耘を助け給ふ、水を畦溝に注ぎ、畝の隆起を鎖り、更に白雨を降して之を軟かにし、農夫をして其上に種しめて、植生の萠芽を助け給ふ、「我父は農夫なり」とイエスは言ひ給へり(約翰傳十五の一)、神は眞に忠實なる農夫なり、彼は植生の細事にまで携はり給ふ、彼は種子を護り、之を煖め、之を潤し、其萠芽を見て歡んで之を祝し給ふ、彼を萬軍の主と呼びまつりて宇宙の主宰とのみ見做しまつるは否なり、彼は空の鳥を護り給ひて、其一羽たりとも彼の許可なくして地に隕る事なし(馬太傳十の廿九)、彼は又野の百合花を愛し、之を飾るにソロモンの榮華の極の時だにも見る能はざりし裝を以てし給ふ(同七の廿九)、實に惡魔は都會を作り、神は田舍を造り給へりと云ふ、神は凉しき樹木の蔭に在し、萠出る畝の間を歩み給ふ、彼は農夫の心を以て種子の萠芽を祝し給ふ、祝すべきかな此神！彼は聖殿の聖所に在して民を審判き給ふ神にあらず、畎畝の間に

降りて畦丁と並び耕し給ふ神なり。

第十一節

汝、恩惠を以て年を冠し給ふ、
汝の途に膏滴る。

地を見舞ひ之に灌漑ぎ、畎を潤し、畝を平らかにし、土を水に浸して之を軟かにし、種子の萠芽を促し其成長を助け、其花を開かせ、其果を實らせ、而して終に豐熟の恩惠を以て一年の勤勞を冠し給ふ、戴冠は榮華の極なり、事の完成に達する、之を其加冠と稱す、年は地の一期なり、而して豐熟は其冠冕なり、國王が其頂に戴く金の冠に非ず、黄金色を帶びたる重き禾穀の冕なり、「目を擧げて視よ、田は熟きて收穫時になれり」とキリストは其弟子等に言ひ給へり(約翰傳四の三十五)、汝、年の冠冕を視んと欲するか、目を擧げて觀よ、平野一面金砂を布くが如く、秋風其上を吹きて水ならざる海に金波の揚るを見ん、神は年毎に地を冠し給ふ、紅葉の錦を以て裝ひ、禾穀の金冕を以て之を冠し給ふ、國に一人の王を擧げて民衆をして跪きて之を拜せしむるの

類に非ず、徧く地を冠し給ひて、萬民をして各自、自由の王たるの感あらしめ給ふ、神が豐熟の恩惠を以て年毎に冠を加へ給ふ時に地は實に「王者の國」となりて、其内に王たらざる者一人も無きに至るなり。

年の戴冠式は擧げられて、豐稔の神の之に臨み給ふや、車駕到る所に恩惠の膏滴る、人類の王なる眞の神は豪俠にして寛厚なり、彼は惜むことなくして、すべての善物をすべての人に與へ給ふ、車駕轔々として民の間を過る時に、恩惠は彼の右に滴り、又其左に流る。

第十二節

其恩滴は野の牧場を潤し、
小山は歡喜を以て帶さる。

恩惠は滴りて野の牧場を潤し、小山は歡喜の中に浸さる、前には雨の水を以て潤し給ひ、今は恩惠の膏を灑ぎ給ふ、低き牧場は恩惠を湛え、高き小山は歡喜を佩ぶ、其麓に立て之を仰ぎ視れば、中腹の畑は赤く實りて錦帶を以て山を圍繞るが如し、年の戴

冠の壯儀に會ふて、小山は處女の姿を呈し、歡喜を以て其腰を纏ふを見る。

第十三節

牧場は羊の群を衣、
谷は禾穀を以て飾らる、
彼等は歡喜を以て相應呼へ相歌ふ。

小山の歡喜を以て帶とするあり、又牧場の羊の群を衣、又谷の禾穀を以て飾らるゝあり、羊群密にして聚團する所、之を丘上より望んで毛衣の牧場を被ふが如きの觀あり、而して禾穀熟きて谷を塡むるの所、羅裳の之を飾るの風あり、斯くて小山と牧場と谷との三人の姉妹は衣裳を異にし、裝飾を殊にして、歡喜を以て相應呼へ相歌ふ、神の地を祝し年を惠み給ひしや大なり、民の鼓腹擊壤、以て豐稔を謳ふに止まらず、小山と牧場と谷とは人の感謝に感じて相應呼し相歌ふを聞く、是れ實に豐稔の歌なり、全地が擧りて神の恩惠を謝するの聲なり、願くは斯かる聖き高き深き聲の我國の野と山とより揚らんことを。

詩篇片々

(一)

第百二十一篇、一、二節

我れ山に向ひて我が目を擧ぐ、
問ふ、我が援助は何處より來るやと、
我が援助はエホバより來る、
天地を造り給へるエホバより來る。

我れ時に我が眼を擧げて援助を求む、獨り心に問ふて曰ふ、我が援助は何處より來る耶と、然り、我が援助は政府より來らず、敎會より來らず、將た又我が修養よりも信仰よりも來らず、我が援助はエホバより來る、宇宙を造り給へるエホバより來る、我が援助は人より來らず、又自己より來らず、外より來らず、衷より來る、然かも我ならざる衷より來る、天地を造り給ひて、而かも我が靈に宿り給ふ神より來る、故に我は人に對して獨立なり、然れども自己に依らずして他者に賴る、我は强し、然れども誇るを得ず、我が援助をエホバに仰いで、我は謙下りて强健なるを得るなり。

(二)

第三十篇五節

エホバの怒はたゞ暫時のみ、
然れど其惠は終身なり、
涙は一夜宿ることあるも、
歡喜は朝と共に來らん。

エホバは怒り給はざるにあらず、我等に刑罰の臨まざるにあらず、然れども是れたゞ暫時のみ、彼の恩惠は延びて終生に涉るなり、懲罰は例外なり、而して恩惠は常則なり、涙は時に浮ばざるに非ず、然れども是れ單に旅人の一夜を我家に過すが如し、朝來れば彼は去り、而して歡喜は彼に代りて永へに我と共に住むなり、苦痛は暫時のみ、

歡喜は永久なり、涙は旅人の如くにして去り、感謝は家人の如くにして來り住む、然り、歡喜は朝と共に來らん、旭陽暗黑を排して昇る時に、我が唇に讃美の聲揚る。

（三）

第七十七篇七、八節

主は永へに棄たまふや、
彼は再たび惠み給はざるや、
其慈愛は殘りなく去りしや、
其約束は世々に廢りしや、
神は惠むべく忘れ給ひしや、
彼は怒りて其矜恤を緘ぢ給ひしや。

不可能事なり、斯かる事は永久に有るべからざるなり、之を問ふて其然らざるを知るなり、斯かる妄想の時に我等の心に浮ばざるにあらず、然れども明白に之を言辭に表はし見て、其如何に不合理なる乎を知る也、懷疑は懷疑として永く心に包むべからざるなり、時に之を言辭に表はして自から己れの不信を責むべきなり、世に解答を要せざる問題あり、而して以上の如きは其最も著明なる者なり。主なる神は永へに我等を棄て給ひしとよ！不可能事なり。彼は再たび我等を惠み給はずとよ！荒唐なり。其慈愛は殘りなく去りしとよ！無稽なり。彼の約束は世々に廢れりとよ！妄誕なり。彼は惠むべく忘れ給ひしとよ！思惟するだも能はず。彼は怒りて其矜恤を緘ぢ給ひしとよ！然り、天地は消失するとも此事は有るべからず。信仰上の荒唐無稽とは是等の事を謂ふなり、我等は如何なる困難に遭遇するも斯かる疑問をだに擧ぐべからざるなり。

（四）

第七十六篇一、二、三節

神はユダに知られ給ふ、
其名はイスラエルに高し、

其幕屋はサレムに在り、
其聖座はシオンに在り、
彼處に彼は弓と火箭とを折り給へり、
盾と劍と戰爭とを挫き給へり。

神はユダに知られ給ふ、異邦に知られ給はず、彼の聖名は選民の中に高し、彼の幕屋は「平和」を意味するサレムに於て張らる、彼はシオンに鎮座し給ふ、而して彼處にて彼は弓と箭とを折り給へり、盾と劍とを破毀ち給へり、而して戰爭を廢し給へり、世はキリストの御父なる神を知らず、敎會は彼を知ると稱して實は彼を識らず、彼の名は彼の選み給ひし少數の民の中に高し、彼は和平を愛する者の心に宿り給ふ、彼の居所は聖徒の集會なる聖き新らしきエルサレムに於て在り、而して彼處に在りて、彼は彼等を以て弓と箭とを折り給ふ、盾と劍とを挫き給ふ、巨砲と軍艦とを壞ち給ふ、而して終に戰爭を廢止め給ふ、世界の平和は政府を以て來らず、敎會に由て臨まず、弱きユダと少數のイスラエルとに由て來る、戰爭廢止は彼等の天職なり、而して神は彼

等に由て必ず此大事を成就し給ふ。

(五)

第百十八篇八、九節

エホバに依賴むは
人に依賴むに勝りて好し、
エホバに依賴むは
侯伯に依賴むに勝りて良し。

賴るべきは神なり、人に非ず、彼に依賴むは侯爵伯爵に依賴むよりも遙かに好し、人に依りて失望絕えず、侯伯に賴みて恥辱多し、彼等は憎愛常ならず、褒貶時に循て變ず、エホバは然らず、彼は永遠に變らざる磐なり、彼は衰ふる時の匿所なり、死する時の支柱なり、彼に依賴みて暗黑は愈々光を放ち、衰落は益々慰藉を加ふ、彼に依賴みて恥辱あることなし、旭日の愈々光輝を增して晝の正午に至るが如く、彼に依賴み

て我等の生涯は歳の愈々邁むに循て榮光を増して天の福祉に近づくなり、富貴も名譽も、位階も勳章も何の慰藉を我等に供せざる時に、エホバは其聖顔を我等に向け給ひて、我等の寂寞を癒し給ふ。

（六）

第七十一篇二十節

汝、多くの重き苦難に我を會はせ給ひし者、
汝は復たび我を活かし給はん、
而して地の深き所より我を擧げ給はん。

人世に悲慘事多し、然れども之を償ひて尚ほ餘りあるの恩惠事あり、復活是れなり、此事ありて、而して又此事を望んで、此涙の谷は歡喜の樂園と化する也、我も亦多數の人と共に此世に在りて多くの重き苦難に會ひたり、然れども我は望み又信ず、我神のキリストに在りて我を復たび活かし給ふを、而して墓の底より我を擧げ給ひて我を

して天の清き所に住ましめ給ふを、而して此大希望の我が衷に存するが故に我は此世のすべての苦難に勝ち得て餘りあり、嗚呼死よ、汝の刺は安くに在るや、嗚呼陰府よ汝の勝利は安くに在るや、夫れ我等が受くる暫らくの輕き苦しみは極めて大いなる限りなき重き榮を我等に得しむる也。哥林多後書四章十七節。

（七）

第六十二篇九節

實に低き人は虛し、
高き人は僞なり、
權衡に懸くれば上に上り、
氣息よりも輕し。

人に貴賤上下の別なし、彼等はすべて虛しく又僞なり、貴族なればとて貴からず、然れば平民なればとて信ずるに足らず、貴族も平民も等しく神に反きし者にして彼の眼

の前には滅亡の子なり、之を正義の權衡に掛けん乎、少數の貴族も多數の平民も錘に對して上に上がり、輕きこと氣息の如し、然らば我等は貴族にも賴らざるべし、平民にも賴らざるべし、帝國主義をも取らざるべし、社會主義をも唱へざるべし、我等は神に賴り彼の福音を唱道すべし、所謂階級戰爭に加はりて上に與みして下を壓せざるべし、又下に與みして上を苦しめざるべし、我等は神に與みして善は到る所に之を贊け、惡は到る所に之を排すべし。

（八）

第五十五篇二十二節

汝の重荷をヱホバに委ねよ、
彼は汝を擔ひ給はん、
彼は義人の動かさるゝ事を決して允し給はざるべし。

「汝の重荷をヱホバに委ねよ」、自身之を負はんとする勿れ、自から之を擔はんとする

が故に汝に堪え難きの苦痛あるなり、之をヱホバに委ねよ、彼は容易く之を擔ひ得るなり、而して汝の重荷を汝に代て擔ひ給ふに止まらず、之と共に汝自身をも擔ひ給ひて、汝の心に平康を賜ふなり。彼は義人、即ち彼に依賴む者、即ち彼と義しき關係に於て在る者の動かさるゝことを決して允し給はざるべし、然り、決して允し給はざるなり、世の所謂る義人の動くことあり、然れども神の義人の動くことなし、神の義人は信仰の人なり、信賴の人なり、義を神より仰ぐ人なり、我は義人なりと云ふ人にあらず、罪人なる我を憐み給へと云ひて神の慈愛に縋る者なり、而して斯かる者は決して動かさるゝことなし、彼が毅然として獨り立て動ざるにあらず、愛の神が彼の動かさるゝことを允し給はざるなり、信仰の人は弱きが如くに見えて强し、そは大能のヱホバ彼を彼の重荷と共に擔ひ給へばなり、彼れ自身は弱し、然れども彼を擔ひ給ふヱホバは强し、彼は世の嘲弄の中に在りながら終に世を彼の足凳となす者なり。

(九)

第百六篇十五節

エホバは我等の祈願を聽き給へり

而して其靈魂を瘦しめ給へり。

祈禱の聽かるゝことは必しも善き事でない、其れがために却て靈魂が瘦せる場合がある、此世の事業の成功を祈りて、其祈禱の聽かれし結果、信仰は衰へ、希望は失せ、最も無意味なる生涯を送るに至りし信者は尠くない、肉と此世の事に關しては我等の祈禱の聽かれざる事こそ却て恩惠なれ、我等は肉に於て肥えて靈に於て瘦せんよりは寧ろ其正反對を望むべきである。

(十)

第百二十篇五節

禍ひなる哉、我はメセクに宿り

ケダルの傍に住めり。

クロムウエル特愛の對句である、彼は曾て曰ふた、

メセクは延引を意味し、ケダルは暗黑の意なり、主は延引し給ふと雖も、我は信ず

彼は必ず我を彼の幕屋、彼の住所に導き給ふ、

と、メセクとケダルとは蓋しアラビヤ民族中譎詐奸惡を以て聞えし者ならん、彼等の間に宿ると云ふは、詐欺、奸策の到る所に行はるゝ此罪惡の世に住むと云ふことである、エホバの聖徒は此世に在りて實にメセクに宿り、ケダルの傍に住む者である、之を思ふて悲歎に堪えない、然れども クロムウエルの言ひしが如く、「我は信ず」である、「今暫時ありて來者來らん、必ず延引し給ふ事あらじ」である。 希伯來書七章三十七節

(十一)

第五十篇二節

美の極なるシオンより

神は光を放ち給へり。

「美の極」とはラファエルの繪畫ではない、又清麗玉を欺く美人ではない、美の極とはシオンであるトーベン等の音樂ではない、又アンゲローの彫刻ではない、バッハ、ベる、神の座し給ふ所である、彼の聖旨の行はるゝ所である、彼の聖徒が彼と偕にある所である、卽ち天國である、義と愛との充溢るゝ所である、美の極は美形ではない、又美音ではない、美の極は美德である、愛である、愛の行爲である、愛が完全に行はるゝ所、其れが美の極である、而して其れが神の寶座の在る所のシオンである。

「神はシオンより光を放ち給へり」、自己を人の子に示し給へり、前にはシナイの巔より火と煙の中に其律法をモーセに授け給へり、後にはセラピムの翼の上より其義と聖とを預言者等に示し給へり、而して終には其の子イエスキリストを以て其恩寵と眞實とを下し給へり、神は神として超然として天の高きに止り給はず、謙下りて自己を人に顯はし給ふ、美の極は天のシオンである、我等は地にありて之を實見することは出來ない、乍然、我等は天より降り給ひし神の一子を其の聖なる美に於て仰ぎまつりて、

聊か天の極美の一端を窺ふことが出來るのである、今は洵に暗黑の勢力である、然れども神は既に美の極なる天のシオンより其光を放ち給ふた、光は今や暗を逐ひやりつゝある、朝は近し、全地が神の榮の光輝を以て蔽はるゝ時は將に近きにあるのである。

預言書の研究

以賽亞書私譯

序言

是は余自己を慰め、友を益せんがために作りし者なり、學者に批評の材料を供せんがために非ず、其の心して讀まれんことを望む。

余は之を編纂するに方て左の諸書に負ふ所甚だ多し、

日本譯聖書○監督シェレチューースキー(S. I. J. Scheresche wsky)氏支那譯聖書○英譯聖書○ルーテル獨逸譯聖書○猶太人アイザック レーゼル (IsaacLeeser)譯英譯聖書○スキンネル(T.Skinner)氏著『以賽亞書註解』二冊○スミス(George Adam Smith)氏著『以賽亞之書』二冊○デリッチ(Franz Delitzsch)氏『以賽亞書註解』二冊○チーネー(T. K. Cheyne)氏著『以賽亞の豫言』。

其他、以賽亞書に關し余が青年時代より讀み來りし書は之を略す。

註解は附せず、是れ一には余の譯文の既に註解的なるが故なり、二には讀者をして註解に依ることなくして聖書を愛讀するの好習慣を作らしめんがためなり、余は文の配列と字句の選擇とに由りて本文をして在來の譯文よりもより解し易きものたらしめたりと信ず。

以賽亞書第四十章より第四十七章までを前にし、第一章より第九章までを後にせり、是れ前の九章の以賽亞書の樞要部なるが故なり、神、願くは此小にして、而かも至て困難なる勞働の結果を祝福し給はんことを。

第四十章

1 汝等の神エホバ曰ひ給はく、
慰めよ、汝等我が民を慰めよ、
2 懇切にエルサレムに語り之に耳語きて告げよ、

その服役の期すでに終り、
その科すでに赦され、
そのすべての罪はエホバの手によりて倍加して罰せられたりと。

3 聲あり、喚はりて曰はく、
汝等曠野にエホバの途を備へ、
沙漠に我等の神の大路を修めよと。

4 諸の谷は高くせられ、
諸の山と岡とは低くせられ、
曲りたるは直くせられ、
崎嶇きは平かにせらるべし、

5 斯くてエホバの榮光現はれ、
人々な共に之を見るべし。

6 聲あり、曰く、叫べと
我答へて曰く、何をか叫ばんと
曰く、人はみな草なり、
その榮華はすべて野の花の如し、

7 草は枯れ花は凋む、
エホバの氣息その上を吹きしに因るとの
實に民は草なり、

8 草は枯れ、花は凋む、
然れど我等の神の言は永遠に立たん。

9 嘉き音信をシオンに傳ふる者よ、汝高山に登れ、
嘉き音信をエレサレムに傳ふる者よ、汝强く汝の聲を揚げよ

聲を揚げて懼るゝ勿れ、
ユダの邑々に告げて曰へ、汝等の神臨り給ふと。

10 見よ、エホバ能力を以て臨り給はん、
その臂を以て統治め給はん、
見よ、報賞はその手にあり、
勞働の報酬はその前にあり。

11 彼れ、牧者の如くに其群を養ひ給はん、
彼れ、その臂を以て其小羊を集め給はん、
之をその懷に携へ給はん、
子を持てる牝羊は靜かに之を導き給はん、

12 誰か掌をもて海の水を量り、
指をのばして天を度りし者あるや、

誰か量器に地の塵を盛り、
權をもて山を權り、
衡をもて岡を衡りし者ありや

13 誰か主の心を導きしや、
誰か彼の謀士となりて彼を敎へしや

14 訓へられんとて彼は誰に諮りしや、
誰か公道を彼に傳へしや、
また明道を彼に示せしや。

15 見よ、萬國は盤水の一滴の如し、
衡上の微塵の如し、
見よ、島々は立昇る塵埃の如し。

16 レバノンは薪に足らず、
そのなかの獸は燔祭に足らず、

17 エホバの前には國民は皆な無に等し、
彼に取りては是等は皆な虛無に等しき者なり。

18 然らば汝等神を何に較べん乎、
いかなる肖像をもて之に肖せん乎、

19 偶像は冶工之を鑄り、
鍛工、黃金をもて之を覆ふ、

20 供物に乏しき貧しき者は朽ざる木を選み
己のために良工を求め、
動くことなき偶像を建しむ。

21 汝等知らざるか、汝等聞かざるか、
原始より汝等に傳へられざりし乎、

22 汝等地の基の置かれし時より悟らざりし乎、
エホバは地のはるか上に座し給ひて、
其住民を見給ふこと蝗の如し、
彼れ薄絹の如くに天を布き、
住ふべき天幕の如くに之を張り給へり、

23 尊者を無に歸せしめ、
地上の權者を虛たらしめ給ふ、

24 然り、彼等僅かに植らるゝや否や、
然り、彼等僅かに播かるゝや否や、
然り、その幹僅かに地に根ざすや否や、
神その上に吹き給へば卽ち枯る、
暴風枯草の如くに之を捲去る。

25 然らば汝等我を誰に較べん乎、

何に肖せんとする乎と聖者曰ひ給ふ、
26 汝等の眼を揚げて高きを見よ、
誰が是等の天體を創造り給ひしぞ、
彼は數を檢してその萬象を牽出だし、
名を呼びてすべて彼等を呼出し給ふ、
主の勢大なるが故に、その力强きが故に、
一としてその命に應ぜざる者なし。

27 ヤコブよ、汝何故に言ふや、イスラエルよ、汝何故に語るや、
我が途はエホバの前に隱れ、
我が訟は我が神の前を過去れりと。
28 汝知らざるか、汝聞かざる乎、
永久の神のエホバなり、
地の極を創造り給ひし者、
彼は倦むことなし、また疲るゝことなし、
彼の聰明は測り難し、
29 疲れたる者に力を與へ、
勢なき者に强を增し加へ給ふことを。
30 青年は倦み疲れ、
壯士も亦衰ふ、
31 然れどエホバを俟望む者は新なる力を得ん、
彼等は鷲の如く翼を張りて昇らん、
走れども疲れず、歩めども倦まざるべし。

第四十一章

1 默して我に聽け、島々よ、

新たなる力を得て我に近き來れ、
而して言はんと欲する所を言へ、
我等相近よりて辯論はん。

2 誰か日の出づる方より一の人を起し、
正義をもて之を我が足下に召し、
その前に諸國を服せしめ諸王を治めしめ、
彼等の劍を塵の如くならしめ、
彼等の弓を吹廻さるゝ切株の如くならしめしや、

3 彼れ彼等を逐ふて行過ぐ、
其迅速さこと地を履まずして道を行くが如し。

4 誰か此事を計り此事を行ひしや、
誰か太初より世々の人々を呼起せしや、
我れエホバなり、始に在りし者、
また終と共に在るものなり。

5 島々は見て駭けり、
地の極は戰慄けり、
彼等は相集り來れり、

6 而して隣人互に相扶け、
その伴侶に語りて言ふ、心を強くせよと、

7 冶工は鍛工を勵まし、
槌を以て平らかにする者は鐵砧を打つ者を勵まし、
金板の接合の成るを見て曰ふ「是れにて足れり」と、
而して釘をもて之を堅うして搖くことなからしむ。

8 然れど我が僕イスラエルよ、
我が選めるヤコブよ、

9 我が友アブラハムの裔よ、
我れ地の極より汝を携へ來り、
地の端より汝を召し、
而して汝に言へり「汝、我が僕よ、
我れ汝を選み汝を棄てず」と、

10 懼るゝ勿れ、我れ汝と偕に在り、
驚く勿れ、我は汝の神なり、
我れ汝を强くせり、然り、我れ汝を助けん、
然り我が正義の右手を以て汝を支えん。

11 視よ、汝に向つて怒を發せし者を……彼等は耻辱を獲て狼狽へん、
汝と競ひし者を、……彼等は無きが如き者となりて亡び失せん、

12 汝と爭ひし者を、……汝、彼等を尋ねて會はざるべし、
汝と鬪ひし者を、……彼等は無きが如き者、虛しき者となるべし、

13 そは我れ汝の神エホバは汝の右手を取り、
「懼るゝ勿れ、我れ汝を助けん」と言ふ者なればなり、

14 懼るゝ勿れ、汝、虫に等しきヤコブよ、汝等イスラエルの者等よ、
「我れ汝を助けん」とエホバ宣べ給ふ、
彼は汝の贖主、イスラエルの聖者なり。

15 視よ、我れ、汝を新しき鋭利なる打麥器となさん、
汝、山を打ちて微塵に打碎かん、
岡を打ちて粃糠の如くに爲さん、

16 汝、之を欲がん、而して風之を捲去らん、
狂風之を吹散さん。

17 然れど汝はエホバによりて喜ばん、
イスラエルの聖者によりて誇らん。
貧者と乏者とは水を求めて得ず、

その舌渇きて燥く時、
我れエホバ彼等に聽て應へん、
イスラエルの神は彼等を棄てざるべし。

18 我れ河を禿の山に開き、
泉を谷の中に出だし、
曠野を水の溜となし、
焦土を水の源となさん、

19 我れ曠野に香柏、アカシヤ、桃金孃、油樹を植えん、
沙漠に杉、松、黄楊を共に置かん、

20 彼等之を見て識り、考へ、且つ曉らん、
即ちエホバの手此事を爲し、
イスラエルの聖者之を造りしことを曉らん。

21 いま汝等の訴訟を述べよとエホバ宣べ給ふ、
汝等の證據を擧げよとヤコブの王言ひ給ふ、

22 之を擧げよ、即ち後にあらんことを我等に示せ、
その最先に成るべきことの何たる乎を示せ、
我等熟思して其結局を見ん、
或ひは將さに來らんとする事を我等に宣べよ、

23 後に來らんとすることを我等に示せ、
我等汝等が神なるを知らん、
或ひは禍ひせよ、或ひは禍ひせよ、
我等ともに見て駭かん。

24 視よ、汝等は皆虚なり、汝等の作す所も亦虚なり、
賤むべきかな汝等を選む者は。

25 我れ一人の人を北より起したり、
彼れ日の出づる方より來りて我名を籲ばん、
彼れ來て侯伯を泥の如くにせん、恰かも陶工が土を踐む如くにせん。
26 誰か太初より告げて我等をして曉らしめたりしや、
誰か昔より示して我等をして「實に然り」と言はしめしや、
一人だに告げし者なし、一人だに示せし者なし、
一人だに汝等の言を聞きし者なし。
27 我れ豫めシオンに曰はん「視よ、彼等を視よ」と、
我れ嘉き音信を傳ふる者をエルサレムに予へん、
28 視よ、我れ見まはせしに一人だになし、
是等の中に助言者一人だになし、
之に問へども應ふる者一人だになし、
29 視よ、彼等はすべて虚なり、彼等の所作は無なり、

その偶像は風なり、また空なり。

第四十二章

理想の傳導師

1 視よ我の支持する我が僕を、
我心に適ふ我が選びし者を、
我れ我靈を彼に予へたり、
彼れ異邦人に道を示すべし、
2 彼は叫ばず、その聲を揚げず、
人、その聲を街頭に聞かず、
3 傷める葦を折ることなく、
殘れる燈火を滅すことなし。

4 彼は眞理に循ひて道を傳へん、
彼は衰へず、また憊れず、
全地に道を布くに至らん、
島々は彼の教を待てり。

メシヤの天職

5 エホバかく言ひ給ふ……
彼は天を造りて之を伸べ、
地と其上の萬物を造り、
其上に住む民に氣息を予へ、
其上に歩む者に靈を賜ひし者なり……

6 曰く、我れエホバ公義をもて汝を召したり、
我れ汝の手を取り、汝を護り、
汝を民の契約となし、異邦の光となし、

7 而して瞽者の目を開かしめ
俘虜を獄より出さしめ、
暗に在る者を檻より出さしめん。

8 我はエホバなり、是れ我名なり、
我は我榮光を他の者に予へず、
我頌美を偶像に予へざるなり、

9 先に成るべきことは既に成れり、
我れ今新しきことを汝等に告げん、
事の兆さゞる前に我れ之を汝等に示さん。

讃美の聲

10 エホバにむかひて新しき歌をうたひ、
地の極より其頌美をたゝへよ、
海に浮ぶ人と其中に在る者よ、

11 島々と之に住める民よ。
曠野と其邑々と、
ケダル人の住める村々とはその聲を揚げよ、
セラの民は謳へ、
その山の巓より叫べ、

12 榮光をエホバに奉れ、
その頌美を島々に告げよ、

13 エホバは勇士の如くに出立ち給ふ、
戰士の如くに憤怒を發し給ふ、
大能を現してその敵を攻め給ふ。

エホバの發憤

14 我れ久しく聲を出さず、
默して己を抑へたり、

15 今我れ產の劬勞にかゝりし婦人の如くに叫ばん、
氣息烈しく且つ喘がん、
我れ山と岡とを荒し、
そのすべての草木を枯さん
我れ河を變じて島と化し、
海は之を涸さん、

16 我れ瞽者をその未だ知らざる路に携行き、
その未だ識らざる徑に導かん、
我れその前に暗を光となし、
曲りたる所を直くすべし、
我れ是等の事を爲すべし、爲さでは止まざるべし。

17 彼等刻みたる像に賴む者は、
彼等鑄りたる像に向ひて「汝は我神なり」と言ふ者は、

彼等は退けられ、彼等は甚く辱しめらるべし。

盲目の民

18 汝等聾者よ、聽け、
汝等瞽者よ、見て曉れ、

19 瞽者とは誰ぞ、我僕ならずや、
誰か我が遣はせし使者の如き聾者あらんや、
誰か我信賴みし者の如き瞽者あらんや、

20 エホバの僕の如き聾者あらんや、
汝、多くのことを見たり、然れども曉らざるなり、
耳を開きたり、然れども聽かざるなり、

21 エホバはその公義の故をもて
之に大にして貴き律法を賜ひたり、

22 然るに此民は掠められ又奪ひ去られたり、

彼等は皆な穴の中に捕はれたり、
彼等は獄の中に閉込められたり、
彼等は捕虜となれり、而かも彼等を助くる者なし、
彼等は獲物となれり、而かも「還せ」と曰ふ者なし、

23 汝等のうち誰か此事に耳を傾くる者ぞ、
誰か後日のために心を用ゐて聞く者ぞ、

24 ヤコブを獲物として與へし者は誰ぞや、
イスラエルを掠むる者に付せし者は誰ぞや、
是れエホバならずや。

罪の懺悔

我等は彼に對つて罪を犯したり、
彼等は好んでエホバの道に歩まざりき、
その律法に從はざりき、

25 故にエホバは憤怒の烈火をその上に注ぎ給へり、
戰爭の猛火を來らせ給へり、
炎、彼の周圍に燃へしかども彼れ識らず、
彼を焚けども彼れ之を心に留めざりき。

第四十三章

慰藉の辭

1 然れどヤコブよ、汝を造れるエホバ今日ひ給ふ、
イスラエルよ、汝を作れる者斯く曰ひ給ふ、
懼るゝ勿れ、我れ汝を贖へり、
我れ汝を呼ぶに汝の名を以てせり、汝は我が有なり、
2 汝、水の中を過る時、我れ汝と偕に在り、
河を横斷る時、其水汝の上に溢れざるべし、

汝、火の中を歩む時、汝は燒かれざるべし、
其焰は汝を焦さゞるべし、
3 そは我れエホバは汝の神なればなり、
我れイスラエルの聖者は汝の救主なればなり、
我れエヂプトを汝の贖代として與へたり、
エテオピヤとセバとを汝の代りに附したり、
4 汝、我が眼の前に貴重なるが故に、
尊くして我れ汝を愛するが故に、
我は人を以て汝に替へ、
民を以て汝の命に代ふべし、
5 懼るゝ勿れ、我れ汝と偕にあり、
我れ汝の裔を東より携れ來り、
西より汝を集むべし、

6 我れ北に向ひて曰はん「放せ」と、
南に向ひて曰はん「留むる勿れ」と。
我子等を遠方より來らせよ、
我女等を地の極より來らせよ、
7 彼等はすべて我が名を以て稱ばれし者、
我が榮光のために我が造りし者、
我が作りし者、然り我が完成せし者なり。

國民の召集

8 見る眼を有ちながら瞽者なる民、
聽く耳を有ちながら聾者なる民を喚び出せよ、
9 國々よ、汝等相集ふべし、
民等よ、汝等來り會すべし、
彼等の中誰か此事を告げ得んや、

誰か先きに成るべきことを示し得んや、
その證據を擧げよ、然らば是とせらるべし、
人をして彼等に聽き「眞に然り」と言はしめよ。

エホバの證人

10 エホバ言ひ給ふ、汝等は我が證人なり、
我が簡びし我が僕なり、
是れ汝等知りて我を信じ、
我が彼なるを曉らんためなり、
我が前に神あるなし、
我が後に神あるべからず、
11 我は……我は眞にエホバなり、
我の外に救主あるなし、
12 我れ告げたり、而して救を施せり、

我れ示したり……
其時汝等の中に他の神なかりき、
汝等は我が證人なり、我は神なりとエホバ言ひ給ふ。
13 然り、今より後も我は彼なり、
我が手より救ひ出す者なし、
我れ爲して何人か妨ぐるを得ん。

イスラエルの救出

14 汝等の贖主イスラエルの聖者エホバ斯く曰ひ給ふ、
汝等のために我れ人をバビロンに送り、
其民をして總て河を下りて逃れしめ、
カルデヤ人をして其宴樂の船に乘りて逃れしめん、
15 我れエホバは汝等の聖者なり、
イスラエルを造りし者にして汝等の王なり。

16 エホバ斯く曰ひ給ふ……
彼は海のなかに大路を設け、
大なる水の中に徑を作り、
17 戎車と馬と、軍旅と軍士とを出來らしめし者なり、
彼等は盡く仆れて起つ能はず、
皆燈火の消ゆるが如くに消えたり……
18 エホバ曰ひ給ふ、
汝等往昔のことを思出づる勿れ、
上古のことを考ふる勿れ、
19 視よ、我れ新しきことを爲さんとす、
今や既に起らんとしつゝあり、汝等之を認めざる乎、
我れ曠野に道を設け、
沙漠に河を出さん、

20 野の獸我を崇むべし、
野犬と駝鳥もまた然り、
我れ水を曠野に出し、
河を沙漠に設けて、
我民我簡びし者に飲ましむべければなり。
21 こは我がために我が作りし民なり、
彼等は我が讃美を宣べん。

イスラエルの忘恩

22 然るにヤコブよ、汝は我を顧び賴まざりき、
イスラエルよ、汝は我がために勞せざりき、
23 汝は燔祭の羊を我に持來らざりき、
又犧牲をもて我を崇めざりき、
我れ供物をもて汝を苦めざりき、

24 又乳香をもて汝を煩はさゞりき、
汝は銀を以て我がために香物を購はざりき、
犧牲の膏を以て我を飽かしめざりき、
汝は反て汝の罪をもて我を苦めたり、
汝の惡を以て我を煩はしたりき。
25 我は、我は實に己がために汝の愆を消す者なり、
我は汝の罪を記へざるべし、
26 我をして想起さしめよ、我等相對して論爭はん、
汝是とせられんがために言はんと欲する所を言へ、
27 汝の始祖罪を犯したり、
汝の教師また我に逆へり、
此故に我れ(異邦人をして)我聖なる祭司を汚さしめ、
ヤコブを詛はしめ、

イスラエルを嘲らしめたり。

第四十四章

恩惠の約束

1 然れども今聽け、我僕ヤコブよ、
我簡びしイスラエルよ、

2 汝を造りしエホバ斯く曰ひ給ふ、
汝を胎内に作りし以來汝を助けし者斯く曰ひ給ふ、
懼るゝ勿れ、我僕ヤコブよ、
我簡びしエシュルンよ、

3 我れ渴ける者に水を注ぎ、
乾たる地に水流を出し、
汝の子等に靈を注ぎ、

4 汝の裔に恩を與ふべければなり、
斯くて彼等は草の如くに蕃らん、
恰かも水濱に生ふる柳の如くならん、

5 或者は曰はん「我はエホバの屬なり」と、
或者はヤコブの名を以て自から稱へん、
或者は我は「エホバの屬なり」と手にて記し、
イスラエルの名を名乘らん。

エホバと偶像

6 イスラエルの王にしてその贖主なるエホバ斯く曰ひ給ふ、
(彼は萬事のエホバなり)、
我は始にして我は終なり、
我の外に神あるなし、

7 誰か我の如く宣べ得んや、

8 若しあらば我前に陳ぶべし、
誰か昔より未來の事を告げしや、
後に成らんとする事を示し得ば示すべし。
汝等懼るゝ勿れ、戰慄く勿れ、
我れ昔より汝に告げしにあらずや、汝に示せしにあらずや、
汝等は我が證人なり、我の外に神あらんや、

9 然り、我の外に磐あるなし、我は其の在るを知らず、
偶像を作る者は……彼等はすべて虛なり、
彼等が慕ふ所のものは益なし、
而して彼等の證人は……
彼等は見えず又曉らず、彼等は辱しめらるべし、

10 神を作りし者は誰ぞ、
益なき偶像を鑄たりし者は誰ぞ、

11 視よ彼等の伴侶はすべて辱しめらるべし、
その職工等は……彼等は人のみ、
彼等相集り、相寄て立つべし、
彼等は驚かさるべし、相共に辱しめらるべし、

12 鐵工は火を以て鑠き、
鎚をもて之を鍛へ、
强き腕をもて之を固む、
彼れ飢れば力衰へ、
水を飲まざれば疲る。

13 木工は繩にて測り、墨にて畫き、
鉋にて削り、定木にて記し、
人の美に像り、人の形に肖て作り、
而して之を家の中に安置す。

14 或ひは香栢を伐仆し、
或ひは槲を採り、或ひは橿を取り、
或ひは林の中の或る他の樹を選び、
或ひは杉を植え、雨をして之を生育たしむ、

15 而して人之を採りて薪となし、
之をもて己が體を煖め、
又之を燃してパンを炕き、
又之を神に作りて拜み、
偶像に作りて其前に平伏す、

16 其半を以て火を燃し、
其半を以て肉を食ひ、
即ち飽くまでに肉を焙りて食ふ、
彼また己を煖めて曰ふ、

17 「ア、我れ煖まれり、我れ熱きを覺ゆ」と、
而して其餘を以て神を作り、其像を作り、
其前に平伏し、之を拜み之に祈りて曰ふ、
「我を救へよ、汝は我神なり」と。

18 彼等は知らず、また悟らず、
其眼塞りて見えず、
其心閉ぢて了らず、
深く心に考ふる者なし、

19 智識と明悟とありて言ふ者なし、
「我れ其半を以て火を燃し、
其炭火の上にパンを炕き、
肉を焙りて之を食ひたり、
我れその餘を以て憎むべき偶像を作らんや、

20 我れ木の斷片に平伏さんや」と。
灰を食ふ者よ！
彼は迷へる心に惑はされて、
己が靈魂を救ふ能はず、
また「我右手に虛妄なき乎」と問ふ能はず、

21 ヤコブよ、イスラエルよ、是等のことを心に留めよ、
そは汝は我僕なればなり、
我れ汝を作りたり、汝は我僕なり、

22 イスラエルよ、汝は我に忘れられざるべし、
我れ霧の如くに汝の愆を消したり、
雲の如くに汝の罪を散らしたり、
我に還れよ、我れ汝を贖ひたればなり。

宇宙萬物の頌讃

23 歌へよ、天よ、エホバは此事を爲し給へり、
叫べよ、地の低き所よ、
聲を發ちて謳へよ、汝等山々よ、
林と其中にあるすべての木よ、
エホバはヤコブを贖ひ給へり、
イスラエルの中に其榮光を現はし給はん。

ペルシヤ王クロスの聖召

24 エホバ斯く曰ひ給ふ、
我は汝を贖ふ者、汝を胎内より作りし者なり、
我は萬事を成就るエホバなり、
獨り天を伸べ、
自から地を闢き、

25 誇張者の言を空しからしめ、
賣卜者を狂せしめ、
智者をして後に退かしめ、
其智慧を愚かならしめ、

26 我僕の言を遂げしめ、
我使者等の謀を成らしめ、
エルサレムに就て言ふ「再び居民あらん」と、
ユダの諸の邑に就て言ふ「再び建てらるべし」と、
又「我れその荒廢たる所を興さん」と、

27 淵に命じて言ふ「乾け」と、
又「我れ汝の川々を涸さん」と、

28 又クロスに就て言ふ「彼は我が牧者なり、
彼れ我すべて好む所を爲さん」と、
彼はエルサレムに就て言はん「汝は建てらるべし」と、
又聖殿に就て言はん「汝の基は据えらるべし」と。

第四十五章

クロスの選拔

1 我れエホバ我受膏者クロスの右手を執り、
諸の國を其前に降らしめ、
諸の王の腰を解き、
扉をその前に開き、
門をしてその前に鎖されざらしむ。

2 エホバ彼に斯く曰ひ給ふ、
我れ汝の前に行き、
崎嶇を平かにし、

銅の門を毀ち、
鐵の關木を斷つべし、

3 我れ汝に暗中の財貨を與へ、
また密處の寶物を附さん、
是れ我はエホバ、名を以て汝を召し者、
イスラエルの神なるを汝に知らしめんためなり、

4 我僕ヤコブ我簡べるイスラエルのために、
汝我を知らざるも我は汝の名を以て汝を召したり、

5 我は汝に尊稱を附したり、
我はエホバなり、外に神あるなし、
我の外に神あるなし、

6 汝我を知らざるも我は汝を固うせり、
是れ日の出づる所より日の入る所まで、

人皆な我の外に神なきことを知らんためなり、
我は實に神なり、外に神あるなし、

7 我は光を作り又暗を造る、
我は平和を來し又禍害を起す、
是れ皆エホバの爲す所なり。

義の雨と義の草

8 天よ、上より滴らせよ、
雲よ、義を降らせよ、
地は開けて救を生ぜよ、
義を萠出さしめよ、
是れ我れエホバの造す所なり。

エホバの權能

9 土器の破片たるに過ぎざるに、

その造主と爭ふ者は禍なるかな、
土塊は陶人に向ひ「汝何を作る乎」と言ふ乎、
又汝の作りし者汝に向ひ「汝の手に由らず」と言ふ乎、
10 父に向ひ「汝何故に生みしや」と言ふ者は禍なるかな、
婦に向ひ「汝何故に産の劬勞を爲せしや」と言ふ者は禍なるかな、
11 イスラエルの聖者にして其造主なるエホバ斯く言ひ給ふ、
後に來らんとする事に就て我に質さんとする乎、
我が手の工に就て我に命ぜんとする乎、
12 我は地を作れり、
而して其上に人を造れり、
我は我手をもて天を引伸したり、
而してその萬象の列を定めたり、
13 我は正義に順ひて彼れクロスを起したり、

我れ其すべての道を直くすべし、
彼は我が城市を建つべし、
又價と報となしに俘囚を釋すべし、
是れ萬軍のエホバの言なり。

クロスの萬邦征服

14 エホバ斯く言ひ給ふ、
エヂプトの工業とエテオピヤの商業と、
身の丈高きセバ人とは、
汝に來り汝に屬すべし、
彼等自から鎖を纏ひて汝に從ひ、
汝の前に俯伏して汝に求めて言ふべし、
實に神は汝の中にあり、
彼を除いて外に神あるなしと。

15 ヱホバとイスラエル

實に汝は己を隱し給ふ神なり、
救を施し給ふイスラエルの神よ、

16 彼等は辱しめらるべし、
彼等はすべて惑はざるべし、

17 彼等偶像を作る者は諸共に惑ひ亂れて退くべし、
然れどもイスラエルは永遠の救をもてヱホバに救はるべし、
彼等は永遠に至るまで辱しめられざるべし、惑はされざるべし。

18 聖言實行の約束

ヱホバ斯く言ひ給ふ、……
彼は天を造りし者にして彼惟り神なり、
彼は地を作り之を完成し共基を固うし給へり、
徒然に之を造り給はず、人の住所として作り給へり……

19 我はヱホバなり、外に神あるなし。
我は隱れたる所、地の暗き所に於て語らず、
我はヤコブの裔に「徒然に我を尋ねよ」と言はず、
我れヱホバは正を語り、直を告ぐ。

20 汝等諸の國の中に脫れし者よ、
集ひ聚り共に前み來れ、
木の像を擔ひ、
救ふ能はざる神に祈禱する者は無智なる者なり、

21 汝等の論據を擧げ來りて之を述ぶべし、
然り、彼等互に相謀るべし、
誰か此事を古より示したりしや、
誰か此事を昔より告げたりしや、
我れヱホバならずや、我の外に神あるなし、

22 我は義しき神にして救ふ者なり、我の外に神あるなし、
地の極なる人々よ、
汝等我を仰ぎ瞻よ、然らば救はるべし、
我は神にして外に神なければなり、
23 我は己を指して誓ひたり、
正義は我が口より出でたり、是れ反ることなき言なり、
即ちすべての膝は我が前に跪き、
すべての舌は我に誓はんと。
24 人、我に就て言はん「正義と能力とはエホバにのみあり」と、
すべての人は必ずエホバに詣らん、
而して彼に逆ひしすべての人は辱しめらるべし。
25 イスラエルの裔はエホバにありて義とせられん、
また彼にありて誇らん。

第四十六章

人に擔はるゝ偶像

1 ベルは伏しネボは屈む、
彼等の像は獸と家畜の上にあり、
汝等が擔ぎ歩きしものは荷となりて、
疲れし獸の負ふ所となる。
2 彼等は屈みたり、彼等は共に伏したり、
彼等は荷となりしものを救ふ能はず、
彼等自からも捕虜となりて行けり。

人を擔ふエホバ

3 我に聽けよヤコブの家よ、
イスラエルの家の遺れる者よ、

腹の中より我に負はれ、
胎の中より我に擔はれし者よ、
4 年老ゆるまで我は彼なり、
髪白くなるまで我は擔はん、
我は斯く行へり、我は負はん、
我は擔はん、而して救はん。

エホバと偶像との比較

5 汝等誰に我を較べ、誰に比へ、
誰に擬へて彼と我とを較べんとする乎。
6 彼等嚢より金を傾け出だし、
權衡を以て銀を度り、
金工を覓めて之に神を作らせ、
其前に俯伏し、之を拜む、

7 彼等は之を肩に負ひ、之を擔ぎ、
行て之を其處に安置す、
而して彼は立て其處を離れず、
人、彼に向ひ顧べども答ふる能はず、
又之を苦難の中より救ふ能はず。

歴史の神

8 此事を想ひて自から堅うせよ、叛逆者よ、
此事を心に留めよ、
9 汝等古より以來のことを想ふべし、
我は神なり、外にあるなし、
神なり、我の如き者あるなし、
10 我は始より終を告げ、
昔より未だ成らざることを示したり、

我は言へり「我が謀は成らん、
我は我がすべて欲する所を爲さん」と、
11 又「我は東より鷲を招き、
遠國より我が謀を行ふ者を召さん」と、
然り、我は語りたり、我は我言を事實たらしむべし、
我は定めたり、我は行ふべし、
12 我に聽け、汝等心の剛愎なる者よ、
義に遠かる者よ、
13 我れ我義を近づかしむ可し、その來ること遠からず、
我救は澁滯らざるべし、
我れ救をシオンに施し、我榮光をイスラエルに予へん。

第四十七章

1 バビロンの處女よ、降りて塵の中に坐れ、
カルデヤ人の女よ、座を離れて地に坐れ、
汝は復たび婀娜たり嬌たりと唱へられざるべし、
2 磨臼を取りて粉を挽け、
面帕を取り去り裾を褰げ、
脛脚を露はして河を涉れ、
3 汝の肌は現はれ汝の恥は曝さるべし、
我れ仇を報ひて人を顧みず。

バビロンの近下 其一

我等を贖ひ給ふ者はその名を萬軍のエホバと云ふ、
彼はイスラエルの聖者なり。

バビロンの既下 其二

4 カルデヤ人の女よ、默して坐れ、暗所に潛め、
そは汝は復たび國々の主母と稱へられざるべければなり。

5 我れ我民を憤り、我産業を汚し、
之を汝の手に與へたり、
汝、之に憐憫を施さず、
年老いたる者の上に軛を置きて甚く苦めたり、

6 汝曰へらく「我れ永久に主母たらん」と、
斯くて汝は是等の事を心に留めず、
亦その終局を念はざりき。

驕傲は滅亡に先だつ

7 汝、歡樂に耽り、安逸に居り、
心の中に「唯我而已、我の外に人あるなし、
我は寡婦とならじ、また子を失ふことを知るまじ」と念ふ者よ、

8 汝、今聽け、子を失ふ事と寡婦となる事と、
是等の二つの事は一日の中に俄かに汝に臨まん、
汝の魔術の多きと汝の呪詛の繁きとに係はらず、
是等の事は全然汝に來らん、

9 汝は己の惡に恃みて曰へり「我を見る者なし」と、
汝の智慧と汝の聰明とは汝を惑はしたり、
汝は心の中に曰へり「唯我のみ、我の外に人あるなし」と。

10 是故に災害汝に來らん、
汝、呪ひて之を除くることを知らざるべし、
艱難汝に墜來らん、
汝之を攘ふこと能はざるべし、

11 汝の患はざる荒廢俄かに汝に臨まん。
今汝の呪詛に據て立つべし、

汝の多くの魔術を以て嚮ふべし、
是れ汝が幼時より勤め行ひしことなり
汝或ひは益を得ることあらん、
汝或ひは敵を懼れしむることあらん、
12 汝は謀略多きによりて倦み疲れたり、
彼等をして今起て汝を救はしめよ、
彼等天を觀る者、星を窺ふ者、
月を占ふ者をして汝を救はしめよ、
13 看よ、彼等は切株の如くなりて、火之を燒かん、
彼等は己を焰の勢力より救ふ能はざるべし、
14 汝が勤めて行ひたる事は終に斯の如くならん、
汝の幼時より汝と賣買せし者も亦各自その所に彷徨ひ往かん、
汝を救ふ者はあらざるべし。

以賽亞書 第一章

1 是はユダの王ウジヤ、ヨタム、アハズ、ヒゼキヤの時にユダとエルサレムに關しアモツの子イザヤに示されたる默示なり。
2 天よ聽け、地よ耳を傾けよ、其はエホバは語り給はく、
我れ子を養ひ育てしに、
彼等は我に逆けり。
3 牛は其持主を識り、
驢馬は其主人の槽を知る、
然れどイスラエルは識らず、
我民は悟らざるなり。
4 あゝ罪を犯せる國、不義を以て充たされたる民、
惡を行ふ者の裔、道を亂す種族、